

名人長二

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

序

三遊亭圓朝子、曾て名人競と題し画工某及女優某の伝を作り、自ら之を演じて大に世の喝采を博したり。而して爾來病を得て閑地に静養し、亦自ら話術を演ずること能わず。然れども子が斯道に心を潜むるの深き、静養の間更に名人競の内として木匠長二の伝を作り、自ら筆を採りて平易なる言文一致体に著述し、以て門弟子修業の資と為さんとす。今や校合成り、梓に上せんとするに当り、予に其序を需む。予常に以為く、話術は事件と人物とを美術的に口述するものにして、音調の抑揚緩急得て之を筆にするのと能わず、蓋し筆以て示すを得るは話の筋のみ、話術其物は口之

を演ずるの外亦如何ともすること能わずと。此故に話術家必しも話の筋を作為するものにあらず、作話者必しも話術家にあらざるなり。夫れ然り、然りと雖も話術家にして巧に話の筋を作為し、自ら之を演ぜんか、是れ素より上乘なる者、彼の旧套を脱せざる昔話のみを演ずる者に比すれば同日の論にあらず。而して此の如きは百歳一人を出すを期すべからず。圓朝子は其話術に堪能なると共に、亦話の筋を作為すること拙しとせず。本書名人長二の伝を見るに立案斬新、可笑あり、可悲あり、変化少からずして人の意表に出で、而かも野卑猥褻の事なし。此伝の如きは誠に社会現時の程度に適し、優に娯樂の具と為すに足る。然れども是れ唯話の筋を謂うのみ。其話術に至りては之を演ずる者の伎倆に依りて

異ならざるを得ず。門弟子たるもの勉めずんばあるべけんや。若し夫れ圓朝子病癒ゆるの日、親しく此伝を演せば其妙果して如何。長二は木匠の名人なり、圓朝子は話術の名人なり、名人にして名人の伝を演す、其靈妙非凡なるや知るべきのみ。而して聴衆は話の主人公たる長二と、話術の演術者たる圓朝子と、両々相對して亦是れ名人競たるを知らん。

乙未初秋

土子笑面識

一

これは享和二年に十歳で指物師清兵衛の弟子となつて、文政の初め廿八歳の頃より名人の名を得ました、長一郎と申す指物師の伝記でございます。凡そ当今美術とか称えまする書画彫刻蒔絵などに上手というは昔から随分沢山ありますが、名人という者はまことに稀なものでございます。通常より少し優れた伎倆の人が一勉強いたしますと上手にはなれましょうが、名人という所へはたゞ勉強したぐらいでは中々参ることは出来ません。自然の妙というものを自得せねば名人ではございません。此

の自然の妙というものは以心伝心とかで、手を以て教えることも
 出来ず、口で云つて聞かせることも出来ませんゆえ、親が子に伝
 えることも成らず、師匠が弟子に譲るわけにもまいりませんから、
 名人が二代も三代も続くことは滅多にございませぬ。さて此の長
 二郎と申す指物師は無学文盲の職人ではありますが、仕事にかけ
 ては当時無類と誉められ、江戸町々の豪商ものもちはいうまでもなく、
 大名方の鼻ひいき眞こうむを蒙つたほどの名人で、其の拵こしらえました指物も御
 維新しん前までは諸方に伝わつて珍重されて居りましたが、瓦解がかいの
 時二束三文で古道具屋の手に渡つて、何うどかなつてしまいました
 ものと見えて、昨今は長二の作とんというものを頓とんと見かけませぬ。
 世間でも長二という名人のあつた事を知つている者が少すくうござい

ますから、残念でもありませんし、又先頃弁じました名人競くらべのうち錦まいぎぬの舞衣まいぎぬにも申述べた通り、何芸によらず昔から名人になるほどの人は凡人でございませぬゆえ、何か面白いお話があらうと存じまして、それからそれへと長二の履歴を探索に取掛りました節、人力車から落されて少々怪我をいたし、打撲うちみで悩みますから、或人の指図さしずで相そうしゅう州しゅう足柄下あしがらしもごおり郡ぐんの湯河原温泉ゆがわらへ湯治とうじに参り、温泉宿伊藤周造いとうしゅうぞう方に逗留中、図らず長二の身の上にかゝる委くわしい事を聞出しまして、此のお話が出来上ったのでございます。是まことが真まことに怪我の功名と申すものかと存じます。文政ぶんせいの頃江戸の東両国大徳院だいたくいん前に清兵衛と申す指物の名人がござりました。是は京都で指物の名人と呼ばれた利齋りさいの一番弟子で、江戸にまいつて

一時いちじに名を揚げ、箱清はこせいといえは誰知たれ知らぬ者もないほどの名人で、
 当今とうきんにても箱清の指した物は好事こうずの人が珍重ちんじゆういたすことで、文政
 十年の十一月五日に八十三歳で歿くわしました。墓は深川かめがみちよう亀住町
えんまどう 閻魔堂地じちゆう中の不動院のこに遺のこつて、戒名を參清さんせい自じ空くう信しん士しと申し
 ます。この清兵衛が追々年を取り、六十を越して思うように仕事
 も出来ず、女房なくなが歿くわりましたので、弟子の恒太郎つねたろうという器用な
おとな 柔順うでまえしい若者を養子にして、娘のお政まさを娶めあわせましたが、恒太の
 伎倆うでまえはまだ鈍うごうございますから、念入まごの仕事やむずかしい注文なくな
 を受けた時は、皆みんなな長二ながににさせます。長二は其の頃両親とも亡なくなり
 ましたので、煮焚にたきをさせる雇やとい婆ばあさんを置いて、独身ひとりで本所し々
めきり 切きりに世帯しよたいを持つて居りましたが、何ういうものですか弟子を

置きませんから、下働きをする者に困り、師匠の末の弟子の兼かねま

松まつという気軽者を借りて、これを相手に仕事をいたして居りま

すとところが、誰たれいうとなく長二のことを不器用長二と申しますか

ら、何所どこか仕事に下手なところがあるのかと思いますに、左様そうで

はありません。仕事によつては師匠の清兵衛より優れた所があり

ます。是は長二が他の職人に仕事を指図するに、何なんでも不器用に

造るが宜いいい、見かけが器用に出来た物に永持ながもちをする物はない、

永持をしない物は道具にならないから、表面うわべは不細工ぶざいくに見えても、

十とつ百びやく年ねんの後までも毀こわれないように拵こわえなけりや本当の職人で

はない、早く造りあげて早く錢を取りたいと思うような卑ひしい了

簡かんで拵こわえた道具は、何どこ処にか卑ひしい細工が出て、立派な座敷の道

具にはならない、是は指物ばかりではない、画えでも彫物ほりものでも芸人でも同じ事で、銭を取りたいという野卑な根性や、他ひとに褒められたいという諂おべつか諛つかがあつては美しい事は出来ないから、其様そのんな了簡うच्चやを打棄うちつて、魂を籠めて不器用に拵えて見る、屹度きつと美しい物が出来上るから、不器用にやんなさいと毎度申しますので、遂に不器用長二と綽名あだなをされる様になつたのだと申すことで。

二

不器用長二の話を、其の頃浅草蔵前に住居いたしました坂倉さかくら屋助七やすけしちと申す大家たいけの主人が聞きまして、面白い職人もあるもの

だ、予かねて御先祖のお位牌を入れる仏壇にしようと思つて購もとめて置いた、三宅島の桑板があるから、長二に指ささせようと、店の三さん吉ちという丁稚でつちに言付けて、長二を呼びにやりました。其の頃蔵前の坂倉屋と申しては贅沢きわを極めて、金銭を湯水のように使いますから、諸芸人はなおさら、諸職人とも何卒どう鼻肩かを受けたいと願う程でございますゆえ、大抵の職人なら最上等のお得意様が出来たと喜んで、何事を措おいても直すぐに飛んでまいるに、長二は三吉の口上を聞いて喜ぶどころか、不機嫌な顔かおつき色で断りましたから、三吉は驚いて帰つてまいりました。助七は三吉の帰りを待ちかねて店前みせさきに出て居りまして、

助「三吉何故なぜ長二を連れて来ない、留守だったか」

三「いゝえ居りましたが、彼奴は馬鹿でございます」

助「何なんと云った」

三「坂倉屋だか何だか知らないが、物を頼むに人を呼付けると
いう事アない、己おらア呼付けられてへいゝと出て行くような閑ひまな
職人じゃアねえと申しました」

助「フム、それじゃア何か急ぎの仕事でもしていたのだな」

三「ところが左様そうじゃございませぬ、鉋かんなくず屑の中へ寝転んで
煙草を吞んでいました、火の用心の悪い男ですねえ」

助「はてな……手前何と云って行つた」

三「私わたくしですか、私は仰しやつた通り、蔵前の坂倉屋だが、拵え
てもらう物があるから直に来ておくんなさい、蔵前には幾軒も坂

倉屋があるから一緒にまいりましようかと云ったんでございます」

助「手前入ると突いきなり然其の口上を云つて、お辞儀も挨拶もしなかつたろう」

三「へい」

助「それを失礼だと思つたのだらう」

三「だって旦那寝転んでいる方が余よつほど失礼でしょう」

助「ム、それも左様そうだが、何かなん氣に障つた事があるんだらう」

三「左様じゃアございません、全体馬鹿なんです」

助「むやみに他ひとの事を馬鹿なんぞというものではございませんぞ」

と丁稚いましを誠まじめて奥に這入りましたが是まで身柄のある画工でも

書家でも、呼びにやると直に來たから、高の知れた指物職人と侮あなどつて丁稚を遣やつたのは悪かつた、他の職人とは異かつてわいているとは聞いていたが、それ程まで見識のある者とは思わなんだ、今の世に珍らしい男である、御先祖様のお位牌を入れる仏壇を指させるには此の上もない職人だと見込みましたから、直に衣服を着替えて、三吉に詫言を云含めながら長二の宅へ参りました。長二は此の時出来上つた書棚に氣に入らぬ所があると申して、才さい槌づちで叩こき毀わそうとするを、兼松が勿体ないと云つて留めている混雑中でありますから、助七は門口に暫く控えて立聞きをして居りますと、

長「兼公、手前は然てめえうそいうけれどな、拵こせえた当人が拙ますいと思つ物で錢を取るの是不親切というものだ、何家業でも不親切な了簡

があつた日にア、うだつ税のあがる事アねえ」

兼「それだつて此のくれえの事ア素人にア分りやアしねえ」

長「素人に分らねえから不親切だというのだ、素人には分らねえから宜いいと云つて拙ちいのを隠して売付けるのは素人の目を盗ぬすむのだから盗ぬす人も同様だ、手前てめえ盗人をしてでえも銭が欲しいのか、己おらア此こ様な職人だが卑ひしい事ア大嫌でえいだ」

と丹誠こらを凝こして造りあげた書棚をさい槌ますでばらくくに打うち毀こわしました様子ゆえ、助七は驚おどきましたが、益ます々並なの職人でないと感服をいたし、やがて表の障子を明けまして、

助「御免わたくしなさい、私は坂倉屋助七と申す者で、少々親方おやぢにお願い申ましたい事があつて、先刻出だしました召使めいしの者が、早吞はや込みで

粗相を申し、相済みません、其のお詫かた／＼まいりました」
 と丁寧さすがに申し述べましたから、流石さすがの長二も驚き、まご／＼する兼松に目くばせをして、其の辺に飛散っている書棚の木屑を片付けさせながら、

長「へい、これはどうも恐入りました、此の通り取散かして
 ますが、何卒どうぞ此方へ」

と蓆ござの上の鉋屑ふるを振って敷直しますから、助七は会釈をして其そ処こへ坐りました。

助 「御高名は予て承知していましたが、つい掛違ひまして」

長 「私わたくしもお名前なまえは存じて居りますが、用がありませんからお目にかゝりませんでした、シテ御用と仰しやるのは」

助 「はい、お願い申すこともございますが先刻のお詫をいたします……三吉……そこへ出てお詫をしろ」

三吉は不承々々な顔付で上り口に両手をつきまして、

三 「親方さん先刻さつきは口上を間違えまして失礼を致しました、何ど卒御免うかなさい」

とお辞儀をいたしますを、長二は不審そうに見ておりましたが、

長 「へい何なんでしたか小僧さん、何も謝る事ありません……え、

旦那……先刻さつきお迎いでしたが、出ぬけられませんかからお断り申し

たんで」

助「それが間違いで、先刻せんこく三吉さんきちに、親方に願いたい事があるから宅うちに御座るか聞いて来いと申付けたのを間違えて、親方に来てくださるように申したとの事でございます」

長「ム、左様さよういう事ですか、訳さえ分れば宜いいじやありませんか、それより御用の方をお聞き申しましょう」

助「そんならお話し申しますが、実は私わたくし先年から心掛けて、先祖の位牌を入れて置く仏壇を拵えようと思つて、三宅島の桑板の良いのを五十枚ほど購もとめました、此の仏壇は子孫の代までも永く伝わる物でもあり、又火事に焼けてならんものですから、非常の時は持つて逃げる積りです、混雑の中では取落す事もあり、又

他から物が打ぶ付つる事もありませんゆえ、余ほど丈夫でなければな

りませんが、丈夫一式で木口きぐちが橋板のように馬鹿に厚くつては、

第一重くもあり、お飾り申した処が見にくく、つて勿体ないから、

ちよつと

一寸見た処は通例の仏壇のようで、大抵な事では毀こわれませんよ

うに、極ごく丈夫に拵ごえたいという無理な注文でもございますし、そ

れに位牌を入れる物ですから、成るべくは根性の卑そしい粗忽そこつな職

人に指させたくないと思つて、職人を捜して居りました処、親方

はお心掛が潔白で、指物にかけては京都の利齋当地の清兵衛親方

まさ

にも優るといふ評判を聞及びましたから、此の仕事をお願い申し

たいので、手間料には糸目をかけません、何わうぞ私わたくしが先祖への孝

行にもなる事でございますから、この絵図面を斟しん酌しゃくして一ひとほ

骨折ねつてはくださるまいか」

と仏壇の絵図面を見せますと、長二は寸法などを見較べまして、
 長「成程随分難かしい仕事ですが、宜ようがす、此ぐあいの工合やに遣よこつ
 てみましょう…だが急いじやアいけませんよ、兎も角も板を遣よこし
 てお見せなさい、板の乾き塩あんばい梅いによつちやア仕事の都合があり
 ますから」

助「はい、承知いたしました…：…そんなら明みょうあさ朝板をよこす
 ことに致しましょう…：…えゝ是は少のうございませすが、御注文を
 申した印までに上げて置きます」

と金子を十五両鼻紙に載せて差出しますを、長二は宜よく見もい
 たさずに押戻しまして、

長「板をよこして注文なさるんですから手金なんざア要りませ
ん、出来上つて見なければ手間も分りませんから、是はお預け申
して置きます」

助「左様いう事ならお預かり申して置きますから、御入用の
節は何時なんどきでも仰しやつてお遣わしなさい」

と金子を懷中に納めまして、

助「これはお仕事のお邪魔を致しました……そんなら何なにぶん分宜
しくお願い申します、お暇というはございますまいけれど、自然
浅草辺へお出での節はお立寄り下さい」

と暇いとまを告げて助七は立帰り、翌日桑の板を持たせて遣りました
が、其の後長二のちから何なんの沙汰もございません。助七は待遠まちどおでな

りませんが、長二が急いではいけないと申した口上がありますから、下手に催促をしたら腹を立つだろうと我慢をして待つて居りますと、七月なつきめ目にようく漸々出来上つて、長二が自身に持つてまいりましたから、助七は大喜びで、長二を奥の座敷へ通しました。此の時助七は五十三歳で、女房は先年なくな歿つて、跡に二十一歳になるせがれ悴すけぞうの助藏と、十八歳のお島しまという娘があります。助七は待ちに待つた仏壇が出来た嬉しさに、助藏とお島は勿論、店の番頭手代までを呼び集めて、一々長二に引合わせ、仏壇を見せて其の伎う倆ほを賞め、長二を懇ねんごろにもてなしました。

四

助「時に親方、つかん事を聞くようだが、先頃尋ねた折台おりだい所にいたのは親方のお母ふくろさんかね」

長「いゝえ、お母は私わたくしが十七の時死にました、あれは飯めしたき焚たきの雇い婆さんです」

助「そんなら未だ家内は持たないのかね」

長「はい、鼻かゝあがあると銭のことばかり云つて仕事の邪魔になつていけませんから持たないんです」

助「親方のように稼げば、銭に困ることはあるまいに」

長「銭は随分取りますが、持っている事が出来ない性分ですか
ら」

助 「職人衆は皆みんな然そうしたものだ、親方は何が道楽だね」

長 「何も道楽というものはないんですが、只正直な人で、貧乏をしている者を見ると気の毒でならないから、持つてる錢をくれてやりたくなるのが病です」

助 「フム良いい病だ……面白い道楽だが、貧乏人あんなまに余り金を遣りすぎると却かえつて其の人の害になる事があるから、気を付けなければいけません」

長 「其のくれえの事ア知っています、其の人の身分相應に恵まない、贅沢をやらかしていけません」

助 「感心だ……名人になる人は異かわつたものだ、のうお島」

島 「左様さようでございます、誠に善よいお心掛で」

と長二の顔を見る途端に、長二もお島の顔を見ましたから、お島は間の悪そうに眼もとをぼうツと赧くして下を向きます。長二は此の時二十八歳の若者で、眼がきりりとして鼻筋がとおり、何処となく苦味ばしった、色の浅黒い立派な男でございませが、酒は嫌いで、他の職人達が婦人の談でもいたしますと怒るといいう程の真面目な男で、只腕を磨く一方にのみ身を入れて居りますから、外見も飾りもございません。今日坂倉屋へ注文の品を納めにまいりますにも仕事着のまゝで、膝の抜けかゝった盲縞の股引に、垢染みた藍の万筋の木綿袴の前をいくじなく合せて、縄のような三尺を締め、袖に鉤裂のある印半纏を引掛けていて、動きたんびに何処からか鋸屑が翻れるという始末でございま

すから、お島は長二を美しい男とは思いませんが、予て父助七から長二の行いの他にひと異つてかわいることを聞いて居ります上に、今また年に似合わぬ善い心掛なのを聞いて深く心に感じ、これにひきかえて兄の助藏が放蕩に金銭を使い捨てるに思い較べて、窃かにひそ恥じましたから、ちよつと赤面致したので、また長二もお島を見て別に美しいとも思いませんが、是まで貧民に金銭を施すのを、職人の分際で余計な事だ、馬鹿々々しいから止せと留める者は幾許いくくもありましたが、褒める人は一人もありませんでしたに、今十七か十八のお嬢さんが褒めたのでありますから、長二は又お島が褒めた心に感心を致して、其の顔を見たのでございます。助七はそれらの事にすこし毫も心づかず、

「親方の施し道楽は至極結構だが、女房を持たないと活計向くらしむきに損がありますから、早く良いのをお貰いなさい」

長「そりやア知っていますが、女という奴ア吝けちなもんで、お嬢さんのように施しを褒めてくれる女はございませんから持たないんです」

助「フム左様さ、女には教えがないから、仁だの義だのという事は分らないのは道理もつともだ、此の娘なぞは良い所よへ嫁に遣ろうと
思つて、師匠うちを家へ呼んで、読書よみかきから諸芸を仕込んだのだから、
兎も角も理非の弁別がつくようになったんだが、随分金がかゝる
から大抵の家では女にまでは行届ゆきとゞきません、それに女という奴
は嫁入りという大物入がありますからなア、物入と云やア娘も其

の内何処かへ嫁に遣らなければなりません、其の時の箆筒たんすみかさ三重ねと用箆筒を親方に願いたい、何卒心懸けて木の良いいを見付けてください」

長かしこ「畏まりましたが、先せんだつ達て職人の兼という奴が、鑿のみで足の拇おやゆび指つつきを突切つた傷が破傷風はしようふうにでもなりそうで、甚ひどく痛むと云いますから、相州の湯河原へ湯治にやろうと思ひますが、病人を一人遣る訳にもいきませんから、私わたくしちいも幼さい時怪我をした背中のふるぎず旧傷が暑さ寒さに悩みますので、一緒に行つて序ついでで湯治をして来ようと思ひますので、お急ぎではどうも」

助「いゝや今が今というのではありません、行儀を覚えさせるため来月お出入邸やしきの筒井様の奥へ御奉公にあげる積りですから、

娘これさがが下るまでゞ宜いいいんです」

長「そんなら拵ついでえましよう」

助「湯河原は打撲うちみと金瘡きりきずには能いいというから、緩ゆつくり湯治ゆぢをなさるが宜いいい、就ついでてはこの仏壇の作料を上げましよう、幾いくら許くらあげたらよいね」

長「左様……別段の御注文でしたから 思おぼしめし 召まねに適かなうように拵ついでえましたので、思おもつたより手間がかゝりましたが……百両で宜ようございます」

其の頃の百両と申す金は当節の千両にも向う大金で、如何に念入でも一個ひとつの仏壇の細工料が百両とは余り法外でございますから、助七は恟びつくりして、何なんにも云わず、暫く長二の顔を見詰めて居りま

した。

五

助七は仏壇の細工は十分心に適つて丈夫そうには出来たが、百両の手間がかゝつたとは思えません、これは己が余り褒めすぎたのに附込んで、己の家が金持だから法外の事をいうのであろう、^{うち}扱は此奴は潔白な気性だと思いの外、^{ほか}卑しい了簡の奴だなど腹が立ちましたから、

助「おい親方、この仏壇の板は此方から出したのだよ、百両とお前間違ではないか」

長「へい、板を戴いた事ア知っています、何も間違いでございません」

助「是だけの手間が百両とは少し法外ではないか」

長「そう思召しましうが、それだけ手間がかゝつたのです、百両出せないと仰しやるなら宜うがす元の通りの板をお返し申しますから仏壇は持って帰ります……素人衆には分りますまいよ」

と云いながら仏壇を持ちて帰ろうといたしますから、助七が押お留しとめまして、

助「親方、まア待ちなさい、素人に分らないというが、百両という価値ねうちの細工が何処にあるのだえ」

長「はい……旦那御注文の時何と仰しやいました、この仏壇は

大切の品だから、火事などで持出す時、他の物が打付ぶつつかつても、
 又落おつことしてこわも毀れないようにしたいが、丈夫一式で見てくださいが
 拙ますくつては困ると仰しやつたではございませんか、随分無理な注
 文ですが、出来ない事はありませんから、釘一本他手ひとでにかけず一
 生懸命に精たましい神を入れて、漸ようく々御注文通りに拵え上げたのです
 ……私わたくしア注文に違つてる品を瞞ごまかして納めるような不親切をする
 事でえきれア大嫌えです……最初手間料に糸目をつけないと仰しやつたか
 ら請負つたので、斯ういう代物しろものは出来上つてみないと幾許いくら戴い
 て宜いいか分りません、此の仏壇に打つてある六十四本の釘には一
 本々私の精神が打込んでありますから、随分廉やすい手間料だと思
 います」

助「フム、その講釈の通りなら百両は安いものだが、火事の時
 たけながもち
 竹長持の棒でも突かけられたら此の辺の合せ目がミシリといき
 そうだ」

長「その御心配は御道理ですが、外から何様な物が打付つ
 ごもつとも
 ても釘の離れるようなことア決してありませんが中から強く打付
 ひど
 けては事によると離れましょう、併し仏壇ですから中から打付か
 しか
 るものは花立が倒れるとか、香炉が転るぐれえの事ですから、気
 ころが
 遣えはごさいません、嘘だと思召すなら丁度今途中で買って来た
 づけ
 才槌せいづちを持ってますから、これで打擲ぶんなぐつてごらんなせい」

と腰に挿していた櫛かしの才槌さいづちを助七の前へ投出しました。助七
 は今の口上を聞き、成ほど普通の品より、手堅く出来てはいよう

が、元々釘で打付けたものだから叩いて毀れぬ事はない、高慢を
 いうにも程があると思ひましたゆえ、

助「そりやア親方が丹誠をして拵えたのだから少しぐらいの事
 では毀れもしまいが、此の才さいづちで擲なぐつて毀れないとは些ちつと高こうげ
 言んが過すぎるようだ」

と嘲笑あざわらいましたから、正直いちぢず一途の長二はむつと致しまして、

長「旦那……高言か高言でねえか打擲ぶんなぐつてごらんなせい、打
 擲ゆつて一本でも釘が弛ゆるんだ日にやア手間は一文も戴きません」

助「ム、面白い、此の才槌で力一ぱいに叩いて毀れなけりやア
 千両で買つてやろう」

と才槌を持って立上りますを、先刻から心配しながら双方の問

答を聞いていましたお島が引留めまして、

島「お父さん……短気なことを遊ばしますな、折角見事に出来ましたお仏壇を」

助「見事か知らないが、己には氣にくわない仏壇だから打毀すのだ」

島「ではございましょうが、このお仏壇をお打ちなさるのは御先祖様をお打ちなさるようなものではございせんか」

助「ム、左様かな」

と助七は一時お島の言葉に立止りましたが、扱は長二の奴も、先祖の位牌を入れる仏壇ゆえ、遠慮して吾が打つまいと思つて、斯様な高言を吐いたに違いない、憎さも憎し、見事叩つ毀して面

の皮を引剥ひんむいてくりよう。と額ひんむに太い青筋を出して、お島おしのを押退おしのけながら、

助「まだお位牌ゐたいを入れないから構かまう事ことアない……見ていろ、ばらくらくにして見せるから」

と助七は才槌さいちを揮ふり上げ、力ちからに任まかせて何処どこという嫌いやいなく続つけざまに仏壇ぶつだんを打ちましたが、板いたに瑕きずが付つくばかりで、止とめ口ぐち釘くぎ締めは少しも弛ゆるみません。助七は大家たいけの主人しゅじんで重い物ものは傘かさの外持ほかつた事ことのない上に、年としをとつて居ゐりますから、もう力ちからと息いきが續つきませんので、呆ぼろれて才槌さいちを投なり出だして其処そこへ尻餅しりもちをつき、せいゝいって、自分で右みぎの手首てしゅを揉もみながら、

助「お島……水みづを一杯いっぱい……速はやく」

と云いますから、お島が急いで持つてまいった茶碗の水をグツと呑みほして太息おおいきを吐きつ、顔色やわらを和やげわららまして、

助「親方……恐入りました……誠に感服……名人だ……名人の作の仏壇、千両でも廉やすい、約束通り千両出しましたよう」

長「アハ、精神たましいを籠こめた処ところが分わりましたか、私わつちやア自慢こんをないう事だい大嫌きらいだが、それさえ分われば宜ようがす、此こ様んに瑕あが付いいやア道具道具にはなりませんから、持つて帰かつて其その内うちに見付みかり次第しだい、元の通り通りの板いたはお返かえし申まします」

助「そりやア困こる、瑕あがあつても構かまわないから千両千両で引取ひろううというのだ」

長「千両千両なんて価値ねうちはありません」

助 「だって先刻賭さつきかけをしたから」

長 「そりやア旦那が勝手に仰しやつたので、私わたくしが千両下さいと云つたのじアねえのです、私わっちア賭事うまれつきア性うまれつき来嫌きらいいです」

助 「左様そうだろうが、これは別物だ」

長 「何だか知りませんが、他ひとの仕事わざを疑うたがぐるといふのが全ぜん体てい気きにくわないから持つて帰かえるんです、銭ぜに金かねに目めを眩くられて仕事わざをする職人しやくじんじやアございません」

と仏壇ぶつだんを持出もしそうにする心底こころの潔白けつぱくなのに、助七すけしちは益々ますます感服かんぷくいたしまして、

助 「まア待つてください……親方おやぢ……私わしがお前の仕事しごとを疑うたがぐつて、折角せきかく丹誠たんじやうの仏壇ぶつだんを瑕物けがものにしたのは重々しんしんわるかつた、其処そこんと

ころは幾重にもお詫をしますから、何卒どうぞ仏壇は置いて行つて下さい」

長「だって此こんな様に瑕が付いてるものは上げられねえ」

助「それが却つて貴いのだ、聖堂の林様はお出入だから殿様にお願い申して、私わしが才槌で瑕をつけた因いわれ由ゆを記かいて戴いて、其の書面を此の仏壇に添えて子孫に譲ろうと思ひますから、親方機嫌を直して下さい」

と只ひたすら管に頼みますから、長二も其の考えを面白く思い、打解けて仏壇を持帰るのを見合せましたから、助七は大喜びで、無類の仏壇が出来た慶よろこびの印として手間料の外に金百両を添えて出しましたが、長二は何うしてもこれを受けませんで、手間料だけ貰

って帰りました。助七は直すぐに林はやし大だ學がく頭のかみ様の邸やしきへ参り、殿様
 に右の次第を申上げますと、殿様も長二の潔白なる心底きりようと伎倆ぎりようの
 非凡へいふんなるに感服かふくされましたから、直に筆を執とつて前の始末を文章
 に認しためて下さいました。其の文章は四角な文字ばかりで私わたくしどもに
 は読めませんが、是またも亦名文で、今日こんにちになつては其の書物かきものば
 かりでも大層な価値ねうちがあると申す事でございます。斯様に林大學
 頭様の折紙が付ついている宝物ほうもつで、私も一度拜見ひつこしましたが御維
 新後坂倉屋おちぶが零落おちぶれまして、本所横網よこあみ辺へ引込みひっこました時隣家
 より出た火事に仏壇も折紙も一緒に焼いてしまったそうで、如何
 にも残念な事でございます。それは後のちの話で此の仏壇の事が江戸
 市中の評判となり、大學頭様も感心おはたもとなされて、諸大名や御旗おはたもと下

衆へ吹聴をなされましたから、長二の名が一時に広まって、指物師の名人と云えば、あゝ不器用長二かというように名高くなりまして、諸方から夥しく注文がまいりますがおびたゞ、手伝の兼松は足の疵で悩み、自分も此の頃の寒気のため背中の旧疵が疼み、当分仕事が出来ないと云って諸方の注文を断り、親方清兵衛に後を頼んで、文政三辰年の十一月の初旬、兼松を引連れ、湯治のため相州湯河原の温泉へ出立いたしました。

六

湯河原の温泉は、相州足柄下郡宮上村と申す処にございま

みやかみむら

て、当今は土肥次郎實平の出た処どいじろうさねひらといふので土肥村と改まりまし
て、城堀村しろほりむらにある實平の城山は、真鶴港まなづるみなとから上陸して、吉
浜しはまを四五丁まいると向うに見えます。吉浜から宮上村まで此の
間は爪先上りの路みちで一里四丁ほどです。温泉宿は湯屋（加藤廣
吉ち）藤屋（加藤文左衛門）藤田屋（加藤林平）上野屋（渡邊
さだきち）伊豆屋（八龜藤吉）などで、当今は伊藤周造あまのに天野
某なにがしなどという立派な宿も出来まして、何れいずも繁昌いたしますが、文
政の頃は藤屋が盛んでしたから、長二と兼松は此の藤屋へ宿を取
りました。温泉は川岸から湧出わきだしまして、石垣で積上げてある所
を惣湯そうゆと申しますが、追々開けて、当今は河かわ中の湯、河下かわしもの
湯、儘根まゝねの湯、下しもの湯、南岸みなみぎしの湯、川原かわらの湯、薬師やくしの湯と七

ちとう

湯に分れて、内湯を引いた宿が多くなりました。湯の温度は百六十三度乃至百五度ぐらいで、打撲金瘡は勿論、胃病、便秘、子宮病、りようまちす 儂麻質私などの諸病に効能があると申します。西は西山、東は上野山、南は向山、北は藤木山という山で囲まれていやまあいる山間の村で、そうみよう 総名を本沢と申して、藤木川、千歳川ちとせがわなどという川が通っております。此の藤木川の流が、ながれ 当今静岡県と神奈川県の境界になつて居ります。千歳川の下に五所明神といさかいう古い社があります。此の社を境にして下の方を宮下村と申し、かた みやしたむら あまり 上の方を宮上村と申すので、宮下の方は戸数八十余、人口五百七十ばかり、宮上村は湯河原のことで、此の方は戸数三十余、人口二百七十ばかりで、田畑が少のうございますから、温泉宿の外は

近傍もよりの山々から石を切出したり、炭を焼いたり、種々しゆ／＼の山稼
 ぎをいたして活計くらしを立てている様子です。此の所から小田原まで
 五里十九丁、熱海まで二里半余よで、何れいずへまいるのにも路みちは宜し
 くございせんが、温泉のあるお蔭で年中旅客が絶えず、中々繁
 昌わたりをいたします。さて長二と兼松は温泉宿藤屋に逗留たぢまして、二一ふた
ずしよ週わたりほど湯治をいたしたので、忽たちまち効験きくめが顕あらわれて、両人とも疵き
ずしよ所の疼いたみが薄らぎましたから、少し退屈の気味で、
 兼ちやう「長兄ちやうい……不思議だな、一昨日おと、いあたりからズキ／＼する疼
なくみが失なつてしまつた、能く利く湯だなア」
 長「それだから此こ様な山ん中へ来る人があるんだ」
 兼「本当に左様そだ、怪我そでもしなけりやア来る処じやアねえ、

此処こけえ来て見ると怪我人もあるもんだなア」

長「ム、伊豆相模さがみは石山が多いから、石切職人いしきりじよくにんが始終怪

我をするそうだ、見ねえ来ている奴ア大抵石切だ、どんな怪我で

も一ひとまわり週なわか二週で癒るといふことだが、好いい塩梅にしたもんじ

やアねえか、そういう怪我を度々たびくする処にやア、斯ういう温泉

が湧くてえのは」

兼「それが天道人てんとうを殺さずといふのだ、世界の事せけえア皆んな其そ

様な塩梅あんべいに都合よくなつてゐるんだけれど、人間というお世話やき

が出てごちやまかして面倒くさくしてしまつたんだ」

長「旨い事を知つてゐるなア、感心だ」

兼「旨いと云やア、それ此処こけえ来る時、船から上つて、ソレ休

んだ処とこア何なんとか云つたつけ」

長「浜辺いの好いい景色とこの処ところか」

兼「左様そうよ」

長「ありやア吉浜きちという処とこよ」

兼「それから飯いを喰くつた家うちは何なんとか云つたつけ」

長「橋本屋はしもよ」

兼「ム、橋本屋はしもだ、彼家あそこで喰くつた※の煮肴にぎかなは素す的てきに旨うまかつたなア」

長「魚いが新あたららしいのに、船ふねで臭くえ飯いを喰くつた挙句あげくだつたからよ」

兼「そうかア知しらねいが、今いまに忘わすれられねえ、全ぜん体てい此こ辺へは浜は方かたが近ちかいにしちやア魚いが少すくねえ、鯛たいに比ひ目め魚いか※に、それ

なけりやア方頭魚あまでいと毎日の御馳走が極っているのに、料理方かたがい
ろくして喰わせるのが上手だぜ」

長「そういうと豪氣ごうぎに宅うちで奢うつてるようだが、水みず漬ずをませ
てこせえた婆さんの惣菜そうざいよりア旨旨かろう」

兼「そりやア知れた事だが、湯治とか何とか云やア贅沢ぜいさくが出る
もんだ」

長「贅沢と云やア雉子きじの打うちたてだの、山鳩ひよどりや鶇せうは江戸じやア喰
えねえ、此間こねえだの旨旨かつたろう」

兼「ム、あれか、ありやア旨旨かつた、それに彼あの時喰くつた大根だいこん
さ、此方こつちの大根は甘味があつて旨旨え、それに沢庵たくあんもおつた、細く
つて小せえが、甘味のあるのは別だ、自然薯じねんじよも本場だ、こんな

話をすると何か喰いたくなくなつて堪らねえ」

長「よく喰いたがる男だ、折角疵が癒りかけたのに 油あぶら濃つこい物を喰つちやア悪いよ」

兼「毒になるものア喰やアしねいが、退屈だから喰う事より外たのしア楽たのしみがねえ……蕎麦粉の良いいがあるから打つてもらおうか」

長「己おらア喰いたくねえが、少し相つき伴あおうよ」

兼「そりやア有難い」

と兼松が女中を呼んで蕎麦の注文を致します。馴れたもので程なく打あげて、見なれない婆さんが二階へ持つてまいりました。

兼「こりやア早い、いや大きに御苦勞……兄い一杯やるか」

長「己おらア飲まないが、手前てめえ一本やんない」

兼「そんなら婆さん、酒を一合つけて来てくんねえ」

婆「はい、下物さかなはどうだね」

兼「何があるえ」

婆「鯛たえと鶏卵たまごの汁つゆがあるがね」

兼「それじゃア鯛たいの塩焼に鶏卵の汁を二人前ふたりまえくんねえ」

婆「はい、直すぐに持って来やす」

と婆さんは下へ降りてまいりました。

長「兼かね公見こうなれねえ婆さんだなア」

兼「宅の婆さんよりア穢きたねえようだ、あの婆さんの打った蕎麦だと醬汁したじはいらねいぜ」

長「なぜ」

兼「だって水みずツばな 湧なで塩気がたつぷりだから」

長「穢きたねいことをいうぜ」

と蕎麦を少し摘つまんで喰くつてみて、

兼「そんなに馬鹿にしたものじゃアねえ、中々旨うめえ……兄い喰くつてみねえ……おゝ婆さん、お爛かんが出来たか」

婆「大きに手間取りやした、お酌をしますかえ」

兼「一いっぺい杯はい頼たのもうか……婆さんなか／＼お酌が上手だね」

婆「上手にもなるだア、若い時わけから此家こっちでお客の相手えしたか

らよ」

兼「だつてお前今日初めて見かけたのだぜ」

婆「左様だがね、私わしイ三十の時から此家こつちへ奉公して、六年前ぜんに

近所へ世帯しよたいを持ったのだが、忙せわしねえ時ア斯うして毎度めいど手伝に

来るのさ、一昨日おとついおせゆツ娘こが塩梅あんべいがわりいつて城堀しろほりへ歸けえつた

から、当分てつで手伝てつでえに來たのさ」

兼「ム、左様そうかえ、そうして婆さんお前年めえは幾歳いくつだえ」

婆「もうはア五十八になりやす」

兼「兄い、田舎の人は達者だねえ」

長「どうしても体に骨を折つて欲がねえから、苦勞すくねが寡すくいせい

だ」

婆「お前さん方は江戸かえ」

長「そうだ」

婆「江戸から来ちやア不自由な処だつてねえ」

長「不自由だが湯の利くのには驚いたよ」

婆「左様かねえ、お前さん方の病氣は何だね」

兼「己の^{おれ}ア是だ、この^{おやゆび}拇指を^{のみ}鑿で^{ぶツキ}打切つたのだ」

婆「へえー怖ねいこんだ、石鑿は重いてえからねえ」

兼「己^{おら}ア石屋じゃアねえ」

婆「そんなら何だね」

兼「指物師よ」

婆「指物とア：ム、箱を^{こせ}拵えるのだね、：不器用なこんだ、箱

を拵える位ぐれえで足い鑿い打ぶつとお貫すとア」

長「兼公一本まいったなア、ハ、ハ、」

婆「笑うけんど、お前めえさんのも矢張やっぱり其の仲間かね」

長「己のは左様じゃアねえ、子供の時分の旧ふるきず疵だ」

婆「どうしたのだね」

長「どうしたのか己も知らねえ」

婆「そりやア変なこんだ、自分の疵を当人が知らねいとは……

矢張足かね」

長「いゝや、右の肩の下のところだ」

婆「背中かね……お前めいさん何歳いくつの時だね」

長「それも知らねいのだが、この拇指へえの入るくれえの穴がポカ

ンと開あいていて、暑さ寒さに痛んで困るのよ」

婆「へいー左様そうかねえ、孩ね、っこ児の時そんな疵うでかしちやアおつ死ちんでしまうだねえ、どうして癒ったかねえ」

長「どうして癒ったどころか、自分に見えねえから此こ様な疵のあるのも知らなかつたのさ、九こゝのつ歳の夏のことだっけ、河へ泳ぎに行く、友達が手前てめえの背中にア穴が開いてると云つて馬鹿にしようがったので、初めて疵のあるのを知つたのよ、それから宅うちへ帰けえつてお母ふくろに、何うして此様な穴があるのだ、友達が馬鹿にしていけねえから何うかしてくれろと無理をいうと、お母が涙ぐんで、その疵の事を云われると胸むねが痛くなるから云つてくれるな、他ひとに其の疵を見せめえと思つて裸はだか体で外へ出したことのねえに、何故

泳ぎに行つたのだと云つて泣くから、己もそれつきりにしておいたから、到頭分らずじまいになつてしまつたのよ」

という話を聞きながら、婆さんは長二の顔をしげくと見詰めておりました。

八

婆 「はてね……お前めえさんの母かゝさま様というは江戸者かねえ」

長 「何故だえ」

婆 「些ち」ちと思ひ出した事があるからねえ」

長 「フム、己の親は江戸者じゃアねえが、何処どこの田舎だか己おらア

知らねえ、何でも己おれが五歳いつの時田舎から出て、神田の三河町へ荒物店みせを出すと間もなく、寛政九年の二月だと聞いているが、其の時の火事に全まる焼やけになって、其の暮とつに父さんが死んだから、お母が貧乏の中で丹誠して、己とが十歳とおになるまで育つてくれたから、職を覚えてお母に安心させようと思つて、清兵衛親方という指物師の弟子になつたのだ」

婆そう「左様そうかねえ、それじゃア若もしかお前めえさんの母様はおさなさんと云わねいかねえ」

長「あゝ左様だ、おさなと云つたよ」

婆「父様とつさまはえ」

長「父とつさんは長左衛門ちようざえもんさ」

婆「アレ工魂消たねえ、お前さん……長左衛門殿の拾児の
二助どんけえ」

長「何だと己が拾児だと、何ういうわけでお前そんな事を」

婆「知らなくつてねえ、此の土地の棄児だものを」

長「そんなら己は此の湯河原へ棄てられた者だというのかえ」

婆「そうさ、此の先の山を些と登ると、小滝の落ちてる処があるだ、其処の蘆ツ株の中へ棄てられていたのだ、背中の疵が証拠だアシ」

兼「これは妙だ、何処に知ってる者があるか分らねえものだなア」

長「こりやア思いがけねえ事だ……そんなら婆さんお前己の親

父やお母を知ってるかね」

婆「知ってるどころじゃアねい」

長「そうして己の棄てられたわけも」

婆「ハア根こそげ知ってるだア」

長「左様そかえ……そんなら少し待ってくんな」

と長二は此の先婆さんが如何様いかようのことを云出すやも分らず、次第まことによつては実の両親の身の上、又は自分の恥になることを襖越しの相客などに聞かれては不都合と思ひましたから、廊下へ出て様子を窺うかゞいますと、隣座敷の客達は皆みんなな遊びに出て留守ですから、安心をして自分の座敷に立戻り、何程かの金子を紙に包んで、

長「婆さん、こりやア少ねえがお前めえに上げるから煙草でも買い

なさい」

婆「これはマアでかくお貰い申してお気の毒なこんだ」

長「其の代り今のお話を委しく聞かしてください、他に聞えらと困るから、小さな声でお願いだよ」

婆「何を困るか知んねいが、湯河原じゃア知らねい者は無いだけんどね、私イ一番よく知つてるといふの、その孩児……今じゃア此様なに大くなつてゐるが、生れたばかりのお前さんを苛くしたのを、私イ眼の前に見たのだから」

長「そんならお前、己の實の親達も知つてゐるのか、何処の何と
いう人だえ」

婆「何処の人か知んねえが、私が此家へ奉公に来た翌年の

事だから、私がハア三十一の時だ、左様すると……二十七八年前
 のこんだ、何でも二月の初だった、孩児を連れられた夫婦の客人が来
 て、離家に泊つて、三日ばかりいたのサ、私イ孩児の世話アして
 草臥れたから、次の間に打倒れて寝てしまつて、夜半に眼イ覚
 すと、夫婦喧嘩がはだかつて居るのサ、女の方で云うには、好い
 塩梅に云いくるめて、旦那に押かぶして置いたが、此の児はお
 前さんの胤に違い無いというと、男の方では月イ勘定すると一
 月違うから己の児じゃ無い、顔まで好く彼奴に似ていると云
 うと、女は腹ア立つて、一月ぐれえは勘定を間違える事もあるも
 んだ、お前のように実の無いことを云われちやア苦労をした効が
 ねい、私イもう彼の家に居ねい了簡だから、此の児はお前の勝手

にしたが宜えと孩児を男の方へ打投げたと見えて、孩児が啼くだ
 アね、其の声で何を云つてるか聞えなかつたが、何でも男の方も
 腹ア立つて、また孩児を女の方へ投返すと、女がまた打投げたと
 見えてドツシン〜と音がアして、果にア孩児の声も出なくなつ
 て、死ぬだんべいと思つたが、外の事ことてねえから魂消こているうち、
 ぐず〜口小言を云いながら夫婦とも眠ねてしまつた様子だつたが、
 翌あくるひ日の騒さわぎが大変おき

長「フム、どういふ騒さわぎだつたね」

婆「これからお前めえさんの背中の穴の話になるんだが、此の前江めえ
 戸から来た何なんとか云つた落語家はなしかのように、こけえらで一ひと節休やすむ
 んだ、喉のどが乾かわいてなんねいから」

兼「婆さん、なか／＼旨うめえもんだ、サアこゝへ茶を注ついで置いたぜ」

婆「ハアこれは御馳走さま……一息ついて直すぐに後あとを話しますべ
い」

九

兼「婆さん、それから何うしたんだ、早く話してくんなせえ」
婆「ハア、それからだ、其の翌あくるひ日の七ななつさがり時ときであつたがね、
吉浜しりえいにいる知しりえい合あひを尋ねて復また帰かえつて来るから、荷物は預けて置く
が、初めて来たのだからと云つて、勘定をして二人が出て行つた

サ、其の日長左衛門殿が山へ箱根竹イ芟りに行つて、日暮に下
 りて来ると、山の下で孩児の啼声なきごえがするから、魂消て行つて見
 ると、沢の岸の、茅かやだの竹の生へえている中に孩児が火の付いたよ
 うに啼いてるから、何うしたんかと抱上げて見ると、どうだんべ
 い、可愛そうに竹の切株きつかぶが孩児の肩のところへ突刺つつきつていた
 んだ、これじゃア大人でも泣かずにやア居られねい、打捨うちやつて置
 こうもんならおツ死ちんでしまふから、長左衛門殿が抱いて歸けえつて
 訳え話したから、おさなさんも魂消て、吉浜の医者どんを呼びに
 やるやらハア村中の騒さわぎになつたから、私わしが行つて見ると、藤屋
 の客人の子だから、直すぐに歸けえつて何処の人だか手掛てがかりイ見付けよう
 と思つて客人が預けて行つた荷物を開けて見ると、梅うめ醬びしの曲ま

げもの あぶらツかみ 物と、油紙に包んだ孩児の襦袢しめしばかりサ、そんで二人とも
すてご 棄児をしに来たんだと分つたので、直に吉浜から江の浦小田原と
てわけ 手分えして尋ねたが知んねいでした、何でも山越しに箱根の
 方へ遁ぬげたこんだろうと後あとで評議イしたことサ、孩児は背中の疵
 が大でえに血がえらく出たゞから、所詮助かるめいと医者どんが見
 放したのを、長左衛門殿夫婦が夜も寝ねいで丹誠きくめして、湯へ入れ
 ては疵口を湯でなで、看護をしたところが、効験きくめは恐ろしいもん
 で、六むまわり週も経つただねえ、大でえ穴にはなつたが疵口が癒つてし
 まつて、達者になつたのだ、寿命のある人は別なもんか、助かる
 めいと思つたお前めいさんが此こん様なに大でかかなつたのにやア魂消やした」
 兼「ム、それじゃア兄あいは此の湯河原の温泉のお蔭で助かつた

のだな」

長「左様だ、温泉の効能も効能だがお母や親父の手当が届いたからの事だ、他人の親でせえ其様なに丹誠してくれるのに、
 在血を分けた親でいながら、背中へ竹の突通るほど赤坊を敷
 の中へ投げ込んで棄るとア鬼のような心だ」

と長二は両眼に涙を浮めまして、

長「婆さん、そうしてお前その児を棄てた夫婦の形や顔を覚え
 てるだろう、何様な夫婦だったえ」

婆「ハア覚えていやすとも、苛い人だと思つたから忘れねいの
 さ、男の方は廿五六でもあつたかね。商 人でも職人でも無い
 好い男で、女の方は十九か廿歳ぐらいで色の白い、髪の毛の真

ろ黒な、眼が細くつて口元の可愛らしい美しい女で、縞縮緬しまちりめんの小袖に私わしイ見たことの無い黒え革の羽織を着ていたから、何という物だと聞いたら、八幡黒やわたぐろの半纏革だと云つたつけ」

兼「フム、少し婀娜あだな筋だな、何者だろう」

長「何者だつて其そん様な奴に用はねえ、婆さん此の疵は癒つても乳ねの無いので困つたらうねえ」

婆「そうだ、長左衛門殿どんとおさなさんが可愛かわえがつて貰ちい乳ちいして漸々ようくに育つて、其の時名主様なぬえをしていた伊藤様へ願つて、自分の子にしたがね、名前なぬえが知んねいと云つたら、名主様なぬえが、お前めえ達二人の丹誠で命を助けたのだから二助としろと云わしやつた、何がさて名主様なぬえが命名なづけおや親だんべい、サア村の者かわえが可愛かわえがるめい

ことか、外へでも抱いて出ると、手から手渡しで、むらぎかい村境まで
 行つてしまふ始末さ、わし私らも宜く抱いて守をしたんだが、今じゃ
 ア大でかくなつてハア抱く事ア出来ねい」

兼「冗談じゃアねえ、今抱かれてたまるものかな……そうだが
 兄い……不思議な婆さんに逢つたので、思いがけねえ事を聞いた
 なア」

長「ウム、初めて自分の身の上を知つた、道理で此の疵のこと
 をいうとお母が涙ぐんだのだ……兼かね……己の外げいぶん聞になるから此
 の事ア決して他ひとに云つてくれるなよ」

長「婆さん、お願いだからお前も己のことを此家の人達へ内しよにしていてくんなせえ……これは己の小さい時守をしてくんなすつたお礼だ」

とまた幾許か金を包んで遣りますと、婆さんは大喜びで、

婆「此様に貰つちやア気の毒だが、お前さんも出世イして、斯んな身分になつて私も嬉しいからお辞儀イせずに戴きやす……私益もねいこんだ、お前さんのことを何で他に話すもんかね、氣遣えしねいが宜い」

長「何分頼むよ、お前のお蔭で委しい事が知れて有難え……ム、そうだ、婆さん、お前その、長左衛門の先祖の墓のある寺を

知つてるか」

婆「知つてますよ、泉村いずみむらの福泉寺ふくせんじ様だア」

長「泉村とア何方どっちだ、遠いか」

婆「なアにハア十二丁しちじゅうにべい下しもだ、明日私あすわしが案内あんないしますべいか」

長「それには及ばねえよ」

婆「左様そうかね、そんなら私わしイ下へめえりやすよ、用があつたら

何時でも呼ばらツしやい」

と婆さんが下へ降りて行つた後あとで、長二は己を棄てた夫婦とい

うは何者であるか、又夫婦喧嘩の様子では、外に旦那という者が

あるとすれば、此の男と馴なれあひ合あひで旦那を取つて居たものか、但たゞし

は旦那というが本当の亭主で、此の男が奸夫かんぶかも知れず、何なんにい

たせ尋常の者でない上に、無慈悲千万な奴だと思えますれば、眞まことの親でも少しも有難くごぎいません、それに引換え、養い親は命の親でもあるに、死ぬまで拾ひろいツ子ということをしらず、生うみの子よりも可愛がつて養育された大恩の、万分一も返す事の出来なかつたのは今さら残念な事だと、既こしかた往おもを懐いめぐらして鬱ふさぎはじめましたから、兼松が側はたから種いろく々と言い慰めて気を散じさせ、翌日共に泉村の寺を尋ねました。寺は曹洞宗そうどうしゅうで、清谷山福泉寺と申して境内は手広でございりますが、土地の風習で何いれの寺にも境内には墓はかしよ所を置きませんで、近所の山へ葬りまして、回向えこうの時は坊さんが其の山へ出で張る事ですから、長二も福泉寺の和尚に面会して多分の布施を納め、先祖の過去帳を調べて両親の戒名

を書入れて貰い、それより和尚の案内で湯河原村の向山にある先祖の墓に参詣いたしたので、婆さんは喋りませんが、寺の和尚から、藤屋の客は棄児の二助だということが近所へ知れかゝつて来ましたが、疵の痛みが癒つたを幸い、十一月の初旬はじめに江戸へ立帰りました。さて長二はお母が貧乏の中で洒すぎ洗濯や針仕事をして養育するのを見かね、少しにても早くお母の手助けになろうと、十歳の時自分からお母に頼んで清兵衛親方の弟子になつたのですから、親方から貰こづかいう小遣ぜい銭はいうまでもなく、駄菓子やきいでも焼薯もでもしまつて置いて、仕事場すきの隙を見て必ずお母のところへ持つてまいりましたから、清兵衛親方も感心して、他の職人より目をかけて可愛がりました。斯かよう様に孝心の深い長二でございます

から、親の恩の有難いことは知って居りますが、今度湯治場で始
 めて長左衛門夫婦は養い親であるということを知ったばかりでな
 く、まこと実の親達の無慈悲を聞きましたから、ことさら殊更に養い親の恩が
 有難くなりましたが、両親とも歿ない後は致し方がございませんか
 ら、切せめては懇ねんごろに供養でもして恩を返そうと思ひまして、両親の
 墓のある谷中三崎さんさきの天竜院てんりゅういんへまいり、和尚に特別の回向を
 頼み、供養のために丹誠をこらしてきようづくえ経机きんたい磐台いんたいなど造つて、
 本堂に納め、両親の命日には、雨風を厭いとわず必ず墓まいりをいた
 しました。

斯様な次第でございますから、何となく気分が勝れませぬので、諸方から種々注文がありましても身にしみて仕事を致さず、其の年も暮れて文政四巳年と相成り、正月二月と過ぎて三月の十七日は母親の十三年忌に当りますから、天竜院に於て立派に法事を営み、親方の養子夫婦は勿論兄弟弟子一同を天竜院へ招待して齋を饗い、万事滞りなく相済みまして、呼ばれて来た人々は残らず帰りましたから、長二は跡に残つて和尚に厚く礼を述べて帰ろうといたすを、和尚が引留めて、自分の室に通して茶などを侷めながら、長二が仏事に心を用いるは至極奇特な事ではあるが、昨年の暮頃から俄かに仏三昧を初め、殊に今日の法事は職人の

身分には過ぎて居るほど立派に営みしなど、近頃合点のいかぬ事
 種々あるが是には何か仔細のある事ならん、次第によつては別に
 供養の仕方もあれば、苦しからずば仔細を話されよと懇に申され
 ますゆえ、長二も予て機もあらば和尚にだけは身の上の一伍一
 什を打明けようと思つて居りました所でございますから、幸い
 のことと、自分は斯々の棄児にて、長左衛門夫婦に救われて養
 育を受けし本末を委しく話して居りますところへ、小坊主が案
 内して通しました男は、年の頃五十一二で、色の白い鼻準の高
 い、眼の力んだ丸顔で、中肉中背、衣服は糸織藍万の袷に、
 琉球紬の下着を袷重ねにして、茶献上の帯で、小紋の縞の
 一重羽織を着て、珊瑚の六分珠の緒締に、金無垢の前金物を

打った金革の煙草入は長門の筒つゝぎし差という、賤いやしからぬ拵えですから、長二は遠慮して片隅の方に扣ひかえて居ると、其の男は和尚にぎつ雑と挨拶して布施を納め、一二服煙草を呑んで本堂へお詣りに行きました。其の容ようだい体が頗すこぶる大柄おおへいですから、長二は此こ様な人に話でもしかけられては面倒だ、此の間に帰ろうと思ひまして暇いとま乞ごいを致しますと、和尚は又其の人に長二を紹ひきあわ介して出入場でいりばにしてやろうとの親切心がありますから、

和「まア少しお待ちなさい、今のお方は浅草鳥越とりこえの龜甲屋きつこうや幸兵衛様こうべえというて私わしの一檀家じゃ、なか／＼の御身代で、苦勞人の上に万事贅沢にして居られるから、お近附になつて置くが好えい」
長「へい有難うございますが、少し急ぎの仕事が」

和「今日は最^もう仕事は出来はすまい、ム、仕事と云えば私^{わし}も一つ煙草盆^{こせき}を拵^{こぎ}えてもらいたいが、何ういうのが宜^えいかな……これは前^{せんじゆう}住^{ぢゆう}が持つて居つたのじゃが、暴^{あろ}うしたと見えて此^こ様に毀^{こわ}れて役にたゝんが、落板^{おとし}はまだ使える、此の落板に合^あわして好^えい塩梅に拵^{こぎ}えてもらいたいもんじゃ」

と種々話をしかけますから長二は帰ることが出来ません、其の内^{うち}に幸兵衛は参詣^{さんぎ}をしまし戻^{かへ}つて来て、

幸「毎月墓^{はかまいり}参^{まゐ}をいたしたいと思^{おも}いますが、屋敷家業^{やしきかごう}というものは体が自由になりませんので、つい不^ぶ信^{しん}心^{しん}になります」

和「お忙しいお勤^{ごん}めではなか／＼寺詣^{てらご}りをなさるお暇^{ひま}はないて、暇^{ひま}のある人でも仏様^{ぶつさま}からは催促^{こころ}が来^こんによつて無沙汰勝^{むさたか}になるも

ので」

幸「まア左様いう塩梅で……二一月ふたつきばかり参詣をいたさんうちに御本堂が大層お立派になりました、彼の左の方にある経机は何ど方ちうからの御寄附でございますか、彼様あんな上じようさく作は是まで見ません、余よつほど良い職人が拵こしらえた物と見えます」

和「あの机かな、あれは此こゝ処ゝにござる此の方の御寄附じやて」

幸「へい左様さようですか……これは貴方あなた御免なさい……へい初めてお目にかゝります、私わたくしは幸兵衛と申す者で……只今承まわれれば彼の経机を御寄附になつたと申すことですが、あれは何ど処この何なんと申す者へお誂あつらえになつたものでございます」

長「へい、あれは、へい私わつちが拵こせえたので、仕事すきの際すきに剩あまりつき木

で拵えたのですから思うように出来ていません」

幸「へえーそれでは貴方は指物をなさるので」

和「はて、これが指物師で名高い不器用イ、ヤナニ長二さんという人さ」

幸「フム、それでは予て風聞に聞いた名人の木具屋さん……へえー貴方が其の親方でございますか、慥か本所のメ切とかにお住いですか」

長「左様です」

幸「それでは柳島の私の別荘からは近い……就てはお目にかゝつたのを幸い、差向き客火鉢を二十に煙草盆を五六対拵えてもらいたいのですが、尤も桐でも桑でもかまいません、何時頃までに出

来ますね」

長「早くは出来ません、良く拵こせえるのには木の十年も乾からした筋の良いのを捜さなければいけませんから」

幸「どうか願います、お近いから近日柳島の宅へ一度来てください、漸よう／＼々此間普請こないぢしんが出来上ったばかりだから、種々詠えいえたいものがあります」

長「へい、私わっちはどうも独ひとりもの身せわで忙せわしないから、屹度あが上るとい
うお約束は出来ません」

幸「そういう事なら近日私わしがお宅へ出ましよう」

長「どうか左様そとう願ねがいます」

と長二は斯様な人と応対をするのが嫌いでございますから、話

の途切れたのを機しおに暇いとま乞こいをして帰りました。

十二

後あとで幸兵衛は和尚あつに、

幸「伎倆うでの良い職人というものは、お世辞も軽薄もないものだと聞いていましたが、成程彼の長二も其たちの質たちで、なか／＼面白い人物のようです」

和「職人じやによつて礼儀には疎うといが、心がけの善えい人で、第一陰徳いんとくを施す事が好きで、此の頃は又仏のことに骨を折つていゝるじやて、余程妙な奇特きせきな人じやによつて、どうか鼻肩はなかたにしてや

つてください」

幸「左様さようですか、職人には珍らしい変り者でございしますが、それには何か訳のある事でしょう」

和「はい、お察しの通り訳のあることで、全体あの男は棄児でな、今に其の時の疵が背中に穴になつて残つて居おるげな」

幸「へえー、それは何うした疵で、どういふ訳でございますか」

と幸兵衛が推おして尋ねますから、和尚は長二の身の上を委しく

話したならば、不憫が増して一層鼻肩いちぶしじゆうにしてくれるであろうとの親切から、先刻長二に聞きました一伍一仕いちぶしじゆうのことを話しますと、

幸兵衛は大きに驚いた様子で、左様に不仕合な男なれば一層目をかけてやろうと申して立帰りました後のちは、度々たびく長二の宅を尋ね

て種々の品を注文いたし、多分の手間料を払いますので、長二は他の仕事を断つて、兼松を相手に龜甲屋の仕事ばかりをしても手廻らぬほど忙しい事せわでございました。其の年の四月から五月まで深川に成田の不動尊のお開帳があつて、大層賑いました。其のお開帳へ参詣した帰りがけで、四月の廿八日の夕方龜甲屋幸兵衛は女房のお柳りゆうを連れ、供の男に折詰の料理を提さげさせて、長二の宅へ立寄りました。

幸 「親方宅うちかえ」

兼 「こりやアいらつしやい……兄い……鳥越の旦那が」

長 「そうか、イヤこれは、まアお上あがんなさい、相変らず散かつています」

幸「今日はお開帳へまいって、人込で逆上のぼせたから平清ひらせいで支度をして、帰りがけだが、今夜は柳島へ泊るつもりで、近所を通る序ついでに、妻これが親方に近付になりたいと云うから、お邪魔に寄つたのだ」

長「そりやア好よく……まア此方こつちへお上んなさい」

と六畳ばかりの奥の室まの長火鉢の側へ寢蓆ねござを敷いて夫婦を坐らせ、番茶を注ついで出す長二の顔をお柳が見ておりましたが、何ういたしたのか俄に顔が蒼くなって、眼さかが逆さかづり、肩で息をする変な様子でありますから、長二も挨拶をせずに見ておりますと、まるで気違のように台所の方から座敷の隅々をきよろ／＼見廻して、幸兵衛が何を云つても、只はいとかいゝえとか小声に答えるばかり

りで、其の内に又何か思い出しでもしたのか、襟の中へ顔を入れて深く物を案じるような塩梅で、紙入を出して薬を服のみますから、兼松が茶碗に水を注いで出すと、一口飲んで、

柳「はい、もう宜しゅうございます」

長「何どつか御気分でも悪いのですか」

幸「なに、人込へ出ると毎いっでも血の道が発おこつて困るのさ」

兼「矢張やっぱりの逆上せるので、もっと水を上げましょうか」

幸「もう治りました、早く帰って休んだ方が宜しい……これは親方あいに生憎な事で、とんだ御厄介になりました、又其の内に出ましよう」

とそこへ帰ってまいります。

十三

お柳なりの装なりは南部なべの藍あゐの子持こもち縞しまの袷あじに黒くろの唐とう繻じゆ子すの帯おびに、極ごく
 微塵くみじんの小紋こもん縮緬ちりめんの三紋みつもんの羽織みつもんを着きて、水みづの滴たれるようような鼈べつこ
 甲うの櫛くし笄じがいをささして居いります。年としは四十しじゅうの上うへを余程あま越こして、末す枯が
 れては見みえませんが、色いろある花はなは匂にお失いせずで、何処どこやらに水気みづけがあ
 っつて、若わい時ときは何様どんな美人びじんでああつたかと思おもう程ほどでござございますが、
 来きると突いき然なり病氣びんきで一ひと言ことも物ものを云いわずに帰かへつて行いく後うしろ影かげを
 兼松かねまつが見み送りおくりまして、

兼「兄あにい……ちつと婆おばさんだが好いい女おんなだなア」

長「そうだ、装なりも立派なりだのう」

兼「だが、旨味の無ねえ顔だ、笑いもしねいでの」

長「塩梅あんべえがわるかつたのだから仕方がねえ」

兼「左様そうだろうけれども、一体が桐の糸いとまささという顔立だ、綺

麗ばかりで面白味ねが無ねえ、旦那の方は立派で気が利きいてるから、

桑しらたの白質しらたまじりというのだ」

長「巧うまく見立てたなア」

兼「兄あにも己おのが見立てた」

長「何なんと」

兼「兄あにいは杉あらしの粗理まさだなア」

長「何故」

兼「何故つて厭味なしでさつぱりしていて、長く付合うほど好くなるからさ」

長「そんなら兼、手前は檜の生節かな」

兼「有難え、幅があつて匂いが好いというのか」

長「いゝや、時々ポンと抜けることがあるというのよ」

兼「人を馬鹿にするなア、毎でもしめえにア其様な事だ、おやア折を置いて行つたぜ、平清のお土産とは気が利いてる、一杯飲めるぜ」

長「馬鹿アいうなよ、忘れて行つたのなら届けなけりやアわりいよ」

兼「なに忘れてツたのじやア無え、コウ見ねえ、魚肉の入つ

てる折にわぎく、熨斗のしが挿はさんであるから、進上というのに違いねえ、独身もので不自由というところを察して持って来たんだ、行届いた旦那だ……何が入へつてるか」

長「コウよしねえ、取りに来ると困るからよ」

兼「心配しんぱいしなさんな、そんな吝けちな旦那じゃア無ねえ、もしか取りに来たら己が喰くつちまつたというから兄あにいも喰くいねえ、一合買いつて来るから」

と、兼松は是より酒を買かつて来て、折詰せりの料理を下物さかなに満腹まんぷくして寝ねてしまいました。其そのの翌よくあさ朝長二は何か相談さうだん事があつて大徳院前の清兵衛親方せいべゑおやぢのところへ参まゐりました後あとで兼松が台所だいしよを片付けながら、空の折を見て、長二の云う通り忘れて行いつたので、柳島

から取りに来はしまいかと少し気になるところへ、毎度使いに来る龜甲屋の手代が表口から、

手代「はい御免なさい、柳島からまいりました」
と聞いて兼松はぎよつとしました。

十四

兼松は遁にげる訳にも参りませんから、まごくししながら、

兼「えい何か御用で」

手「はい、御新造ごしんぞ様が此のお手紙をお見せ申して、昨日きのう忘れた物を取って来てくれると仰しやいました」

兼「へえー忘れた物を、へえー」

手「それに此の品を上げて来いと仰しやいました」

と手紙と包つゝみもの物を出しましたが、兼松は蒼くなつて、遠くの方から、

兼「何なんだか分りやせんが、生憎あにき兄えゝ長二が留守ですから、手

紙も皆みんなな置いてつておくんなせえ」

手「いゝえ、是非手紙をお目にかけてと申付けられましたから、お前さん開けて見ておくんなさい」

兼「だつて私わっちにはむずかしい手紙は読めねえからね」

手「御新造様のは毎いっでも仮名ばかりですが」

兼「そうかね」

と怖々手紙を開いて、

兼「えゝと何だナ……鳥渡申上々……はてな鳥なべに

なりそうな種はなかつたが、えゝと……昨日はよき折……さア困

つた、もしお使い、実はね鉋屑の中にあつたからお土産だと

思つてね、お手紙の通り好い折でしたが、つい喰つたので」

手「へえー左様でございますか、私は火鉢の側のように承わり

ましたが」

兼「何処でも同じ事だが、それから何だ、えゝ……よき折から

……空になつた事を知つてるのか知らん、御めもし致……何という

字だろう……御うれしく……はてな、御めしがうれしいとは何うい

う訳だろう、それから……そんじ上……※……サア此の瘦のような字は

何とか云ったツけねえお前めえさん、此の字は何と云いましたツけ」
 手「へい、どれでございます、へい、それはまいらせそろとい
 う字で」

兼「そうく、まいらせそろだ、それにしても何が損じたのか
 訳が分らねえが、えゝと……その折は、また折の事だ喰わなけれ
 ばよかつた……持もちびようおこり……おごりには違ちがえねいが、持もちび
 ようとは何の事だか……あつく御おんせわに……相成り……御おんきもじさまに
 そんじ※……又損じて瘦しぼのような字があるぜ、相さがみ摸さがの相さがという字
 に楠くすのきまさしげ 正せい 成せいの成しげという字だが、相さがしげ成せいじやア分らねえし、又
 きもじさまとア誰の名だか、それから、えゝと……あしからかす
 く御おんかんにん被下度候……何だか読めねえ」

手「お早く願います」

兼「左様そうせ急いちやア尚分らなくなつたら、此のからすくかんざ

えもんとア此こねえだ間御新造が来た夕方の事でしょう」

手「そんな事が書いてございますか」

兼「あるから御覧なせえ、それ」

手「こりやアあしからずく御ごかんにんくだされたくそろでござ

います」

兼「フム、お前めえさんの方がなか／＼旨うめい物もんだ、其の先にむずか

しい字が沢山たんと書いてあるが、お前さん読んでごらんなせい」

手「こゝでございますか」

兼「何でも其の見当だつた」

手「こゝは……其の節置わすれ候そろ懷中物此のものへ御渡おんし被くだされたくそろ下度候、此の品粗まつなれどさし上候あげ先は用事のみあらゝ

※

兼「旨うめい其の通りだ、その結尾しまいにある釣鉤つりばりのような字は何とか云ったね」

手「かしくと読むのでございます」

兼「ウムそうだ、分った事ア分ったが、兄あにいがいねえから、帰つて其の訳を御新造に云つておくんなせい」

と申しますので、手代も困つて帰りました。其の後あとへ長二が戻つて来ましたから、兼松が心配しながら手紙を見せると、

長「昨日きのう御新造が薬を出したまんま紙入を忘れて行つたのを、

今朝見つけたから取りに来ないうちにと思つて、親方の所へ行つた歸りがけに柳島へ廻つて届けに行つたら、先刻取りにやつたと云つたが、また此様な土産物をよこしたのか、氣の毒な、何だ橋本の料理か、兼又一杯飲めるぜ」

兼「ありがてえ、毎日斯ういう塩梅に貰え物があると世話が無えが、昨日のは喰いながらも心配だツた」

長「何も其様な思ひをして喰うにア及ばない、全体手前は意地がきたねえ、衣食住と云つてな着物と食物と家の三つア身分相応というものがあると、天竜院の方丈様が云つた、職人ふぜいで毎日店屋の料理なんぞを喰つちア罰があたるア、貰つた物にして毎日こんな物を喰つちア口が驕つて来て、まずい物が喰えなく

なるから、実ア有がた迷惑だ、職人でも芸人でも金持に鼻屑にされるア宜いが、見よう見真似で万事贅沢になつて、氣位きぐらいまで金持を氣取つて、他の者を見くびるようになるから、己ア金持おらと交際つきあうことア大嫌でえきれえだ、龜甲屋の旦那が来い〜というが、今まで一度も行かなかつたが、忘れて行つたものを黙つて置いちやア氣が済まねえから、持つて云つて投りほう込んで来たが、柳島の宅うちア素的すに立派なもんだ、屋敷稼業というものア、泥坊しやうべのような商しやうべ売えと見える、そんな人のくれたものア喰つても旨くねえ、手前てめえ喰うなら皆みんな喰いねえ、己ア天麩羅でも買つて喰うから」

と雇いの婆さんに天麩羅を買わせて茶漬を喰いますから、兼松も快よく其の料理を喰うことは出来ません。婆さんと二人で少し

ばかり喰つて、残りを近所に住んでゐる貧乏な病人に施すという塩梅で、万事並の職人とは心こゝろ立たが異ちがつて居ります。

十五

長二は母の年ねん回かいの法事に、天竜院で龜甲屋幸兵衛に面会してから、格外の鼻屑びんせつを受けていろく注文物があつて、多分の手間料を貰いますから、活計くわしむき向も豊になりましたので、予かねての心願どおり、思うまゝに貧窮人に施す事が出来るようになりましたのは、全く両親が草葉の蔭から助けてくれるのであろうと、益々両親の菩提《ぼだい》を弔うにつきましたは、愈々いよくまこと実の両親の無

慈悲を恨み、寐ても覚めても養い親の大恩と、実の親の不実を思わぬ時はございませぬ。さて其の夏も過ぎ秋も末になりまして、龜甲屋から柳島の別荘の新座敷の地袋に合わして、唐木からぎの書棚を拵えてくれとの注文がありました。前にも申しました通り、長二はお柳が置忘れた紙入を届けに行つたきり、是まで一度も龜甲屋へ参つた事はございませぬが、今度の注文物は其の地袋もようの摸様を見なければ寸法其の外の工合ぐあいが分りませぬので、余儀なく九月廿八日に自身で柳島へ出かけますと、折よく幸兵衛が来ておりまして、お柳と共に大喜びで、長二を座敷へ通しました。長二は地袋の摸様を見て直すぐに帰るつもりでしたが、夫婦いろくが種々の話を仕かけますので、迷惑ながら尻を落付けて挨拶をして居るうちに、橋本

の料理が出ました。

幸「親方……何にもないが、初めてだから一杯やっておくれ」

長「こりやアお気の毒さまな、私わたくしア酒は嫌いですから」

柳「それでもあろうが、私がお酌をするから」

長「へい〜これは誠にどうも」

幸「酒は嫌いだというから無理に侷すくめなさんな、親方肴でもた

べておくれ」

長「へい、こんな結構な物ア喰った事アございませんから」

幸「だッて親方のような伎うでまえ倆で、親方のように稼いでは随分

儲かるだろうから、旨い物には飽きて居なさろう」

長「どう致しまして、儲かるわけにはいきません、皆みんなな手間の

かゝる仕事ですから、高い手間を戴きましても、一日いちんちに割つてみると何程にもなりやしませんから、なか／＼旨い物なんぞ喰う事ア出来ません」

幸「左様そうじゃアあるまい、人の噂に親方は貧乏人に施しをするのが好きだという事だから、それで銭が持てないのだろう、何ういう心願かア知らないが、若いにしちア感心だ」

長「人は何なんてえか知りませんが、施しといやア大業おおぎようです、私わたくしア小さい時分貧乏でしたから、貧乏人を見ると昔を思い出して、気の毒になるので、持合せの銭をやった事がございますから、そんな事を云うんでしよう」

柳「長さん、お前ちい小さい時貧乏だツたとお云いだが、お父とつさん

やお母^{つか}さんは何商売だったね」

長「元は田舎の百姓で私^{わたくし}の小さい時^{こつち}江戸へ出て来て、荒物屋を始める^{ふくろ}と火事で焼けて、間もなく親父が死んだものですから、母親が貧乏の中で私を育つたので、三度の飯さえ碌に喰わない程でしたから、子供心に早く母親の手助けを仕ようと思つて、十^{とお}歳の時清兵衛親方の弟子になつたのですが、母親も私が十七の時死んでしまつたのです」

と涙ぐんで話しますから、幸兵衛夫婦も其の孝心の厚いのに感じた様子で、

柳「お前さんのような心がけの良い方が、何うしてまア其^{そんな}様に不^ふ仕^あ合^あせ^せだろう、お母さんをもう少し生かして置きたかつたねえ」

長「へい、もう五年生きていてくれると、育ててくれた恩返しも出来たんですが、まゝにならないもんです」

と鼻をすゝつて握拳にぎりこぶしで涙を拭きます心を察してか、お柳も涙ぐみまして、

柳「お察し申します、お前さんのように親思いではお父さんやお母さんに早く別れて、孝行の出来なかつたのはさぞ残念でございましたしょう」

長「へい左様そうです、世間で生の親うみより養い親の恩は重いと云いますから、猶残念です」

柳「へえー、そんならお前さんの親御は本当の親御さんではないの」

と問われたので、長二はとんだ事を云つたと気がつきましたが、今さら取返しがつきませんから。

長「へい左様さよう……私の親わたくしは……へい本当の親ではございません、私を助けて、いゝえ私を養つてくれた親でございます」

幸「はて、それでは親方は養子に貰われて来たので、本当の親御達はまだ達者かね」

長「其様そんな訳じやアございませんから」

幸「そんなら里つ子ながれとでもいうのかね」

長「いゝえ、左様そうでもございません」

幸「どうしたのか訳が分らない」

長「へい、此の事は是まで他にひと云つた事アございませんから、

どうもへい私わたくしの恥はづかですから誠に」

柳「親方何だね、お前さんの心掛こころかが宜よろいというので、旦那だんなが此こ様に可愛めづがつて、お前さんの為ためになるように心配しんぱいしてくださるのだから、話はなしたつて宜よろいじゃアないかね」

幸「どんな事ことか知らないが、次第しだいによつちやア及およばずながら力ちからにもなろうから、話はなして聞きかさない、決して他言たごはしないから」

長「へい、そう御親切ごしんせつに仰おほしやつてくださるならお話をいたしましうが、何卒どうぞ内々ないくに願ねがいます………実まことア私わたくしア棄児すてこです」

柳「お前さんがエ」

長「へい、私わたくしの實まことの親おやほど」

と云いかけて実親じつおやの無慈悲むじひを思おもうも臟腑はらわたが沸にえかえるほど忌い

ま／＼く々しく恨めしいので、唇が瘻攣り、ひきつ 烟管きせるを持った手がぶる／＼ふ顫ふるえますから、お柳は心配氣に長二の顔を見詰めました。

柳「本当の親御達が何うしたのだえ」

長「へい私わたくしの實の親達ほど酷むごい奴は凡およそ世界にございますめえ」とさも口惜くやしそうに申しますと、お柳は胸あたりの辺でひどく動悸どうきでもいたすような慄ふるえ声で、

柳「何故だえ」

長「何故どころの事ことちやアございません、私わたくしの生れた年ですから二十九年前めえの事です、私を温泉のある相州の湯河原の山ん中へ打棄うちちやつたんです、只打棄るのア世間に幾許いくちもございやすが、猫の死んだんでも打棄るように藪ほりこん中へおツ投込んだと見えて、

竹の切株が私の背中へずぶり突通つツとおつたんです、それを長左衛門
 という村の者が拾い上げて、温泉で療治をしてくれたんで、漸よう／＼
 々助ゝかったのですが、其の時の傷ア……失礼だが御覽なせい、
 こん通りポカンと穴になつてます」

と片肌を脱いで見せると、幸兵衛夫婦は左右から長二の背中を
 覗のぞいて、互に顔を見合せると、お柳は忽たちまち真まつさ蒼おになつて、苦し
 そうに両手を帯の間へ挿さ入れ、鳩むな尾さきを強くお圧おす様子でありまし
 たが、圧おさえきれぬか、アーといいいながら其の場へ倒れたまゝ、悶くるし
 え苦くるしみますので、長二はお柳が先刻さつきからの様子と云い、今の有様
 を見て、さては此の女が己を生んだ実の母に相違あるまいと思
 ました。

十六

其の時の男というは此の幸兵衛か、但しは幸兵衛は正しい旦那で、奸夫かんぶは他の者であつたか、其の辺の疑いもありますから、篤とくと探索した上で仕様があると思いかえして、何気なく肌を入れまして、

長「こりやとんだ詰らないお話をいたしましたして、まことに失礼を……急ぎの仕事もございますからお暇いとまにいたします」

幸「まあ宜いじゃアないか、種々いろく聞きたい事もあるから、今夜泊つてはどうだえ」

長「へい、有難うございますが、兼松が一人で待ってますから」
 柳「親方御免よ、生憎また持病が発つて」

長「お大事になさいまし……左様なら」

と急いで宅へ帰りましたが、考えれば考えるほど、幸兵衛夫婦が実の親のようでありますから、それから段々二人の素性を探索いたしますと、お柳は根岸边に住居していた物持某の妻で、某が病死したについて有^{ありがね}金を高利に貸付け、^{やもめぐら}孀暮しで幸兵衛を手代に使っているうち、何時か夫婦となり、四五年前に浅草鳥越へ引移つて来たとも云い、又先の^{せん}亭主の^{ぞんしょうちゆう}存生中から幸兵衛と密通していたので、亭主が死んだのを幸い夫婦になつたのだとも云つて、^{はつきり}判然はしませんが、谷中の天竜院の和尚の話に、何^な

故にゆえか幸兵衛が度々たび／＼来て、長二の身の上は勿論ふたおや兩親の素性などを根強く尋ねるといので、彼是を思い合すと、幸兵衛夫婦は全く親には違いないが、無慈悲の廉かどがあるので、面目なくつて今さら名告なのることも出来ないから、鼻眞はなまことというを名にして仕事を云付け、屢々しばしば／＼往来ゆききして親しく出入でいりをさせようとしたが、此方こつちで親しまないので余計な手間料を払つたり、不要な道具を注文したりして恩を被きせ、余所よそながら昔の罪を償おうとの了簡であるに相違ないが、前非ぜんびを後悔したなら有体ありていに打明けて、親子の名告なのりをすればまだしも殊勝だのに、そうはしないで、現在実子と知りながら旧悪を隠して、人を懐なまけようとする心底は面白くないから、今度来たなら此方から名告りかけて白状させてやろうと待もうけて

居るとは知らず、幸兵衛は女房お柳と何れかへ遊山にまいった帰りがけと見えて、供も連れず、十一月九日の夕方長二の宅へ立寄りしました。丁度兼松は深川六間堀に居る伯母の病氣見舞に行き、雇婆さんは自分の用達に出て居りませんから、長二は幸兵衛夫婦を表に立たせて置いて、其の辺に取散してあるものを片付け、急いで行灯を点して夫婦を通しました。

幸「夕方だが、丁度前を通るから尋ねたのだ、もう構いなさんな」

長「へい、誠にお久しぶりで、なに今皆な他へまいって一人ですから、誠にどうも」

と番茶を注いで出しながら、

長「いつぞやは種々御馳走を戴きまして、それから此来体が悪いので、碌に仕事をいたしませんから、棚も木取ったばかりで未だ掛りません」

幸「今日は其の催促じゃアないよ、彼の時ぎりでお目にかゝらないから、妻が心配して」

とお柳の顔を見ると、お柳は長二の顔を見まして、

柳「いつぞやは生憎持病が発つて失礼をしましたから、今日はそのお詫かた／＼」

長「それは誠にどうも」

と挨拶をしながら立つて、戸棚の中を引掻きまわして、菓子皿を探して、有合せの最中を五つばかり盛って出し、

漸々

長「生憎兼松も婆さんも留守で、誠にどうも」

柳「お一人ではさぞ御不自由でしょう」

長「へい、別に不自由とも思いませんが、此様な時何が何処に蔵しまつて在あるか分りませんので」

柳「左様そうでしょう、それに病み煩いの時などは内儀おかみさんがないと困りますから、早くお貰いなすつては何うです、ねえ旦那」

幸「左様そうだ、失礼な云い分ぶんだが、鰥おとこ夫やもめに何なんとやらで万事所帯に損があるから、好いいの見付けて持ちなさい」

長「だつて私わちのような貧乏人の処とけえは来人きてがございませぬ、来てくれるような奴は碌なわけではございませぬから」

柳「なアに左様したもんじゃアない、縁というものは不思議な

もんですよ、恥を云わないと分りませんが、私は若い時伯母に勧められて或所へ嫁に行つて、さん／＼苦勞をしたが、縁のないのが私の幸福しあわせで、今は斯ういう安樂な身の上になつて、何一つ不足はないが子供の無いのが玉に瑕きずとでも申しましようか、順当なら長さん、お前さんぐらいの子があつても宜いいんですが、子の出来ないのは何かの罰ばちでしょうよ、いくらお金があつても子の無いほど心細いことはありませんから、長さん、お前さんも早く内儀さんを貰つて早く子をお拵こしらえなさい……お前さん貧乏だから嫁に來人がないとお云いだが、お金は何うにでもなりますから早くお貰いなさい、まだ宅うちの道具こしぎを種々拵こしらえてもらわなければなりませんから、お金は私が御用達ごようだてます」

と云いながら膝の側に置いてある袱紗ふくさづゝみ包の中から、其の頃新しん吹ふきの二分金の二十五両包を二つ取出し、菓子盆に載せ、折熨斗おりのしを添えて、

柳「これは少いが、内儀さんを貰うにはもう些ちつと広い好い家うちへ引越さなけりやアいけないから、納とつてお置きなさい、内儀さんが決つたなら、又要るだけ上げますから」

と長二の前へ差出しました。長二は疾とくに幸兵衛夫婦を実の親と見抜いて居りますところへ、最前からの様子といい、段々の口上は尋ひと、おり常との鼻頂びつていでいうのではなく、殊に格外の大金に熨斗を付けてくれるというは、己を確かに実子と認めたからの事に相違ないに、飽までも打明けて名告らぬ了簡が恨めしいと、むか〜

と腹が立ちましたから、金の包を向うへ反飛はねとばして容かたちを改め、両手を膝へ突きお柳の顔をじつと見詰めました。

十七

長「何です此こ様な物を……あなたはお母つかさんでしょう」

と云われてお柳はあつと驚き、忽ちに色蒼あせざめてぶる／＼顫ふるえながら、逡巡あとじさりして幸兵衛の背後うしろへ身を潜めようとする。幸兵衛も血相を変え、少し声を角立てまして、

幸「何だと長二……手前何をいうのだ、失礼も事によるア、気でも違つたか、馬鹿々々しい」

長「いゝえ決して気は違ちがえませぬ……成程隠かくしているのに私わが斯う云つちア失礼かア知りませんが、棄子の廉かどがあるから何時まで経つても云わないのでしよう、打明けたツて私が親の悪事を誰に云いましょう、隠さず名告つておくんなせえ」

と眼を見張つて居ります。幸兵衛は返答に困りまして、うろ／＼するうち、お柳は表の細工場さいくばの方へ遁にげて行きますから、長二が立つて行つて、

長「お母さん、まアお待ちなせえ」

と引戻すを幸兵衛が支えて、

幸「長二……手前何をするのだ、失礼千万な、何を証拠そんに其様さまなことをいうのだ、ハ、ア分つた、手前てまえは己が鼻屑はなぢにするに附込

んで、言いがゝりをいうのだな、お邸やしきがた方の御用達ごようたしをする龜甲屋幸兵衛だ、失礼なことをいうと召連訴めしつれうつたえをするぞ」

柳「あれまア大きな声をおしでないよ、人が聞くと悪いから」

幸「誰が聞いたツて構うものか、太い奴だ」

長「何で私わっちが言いがゝりなんぞを致しましたよう、本当の親だと明しておくんなさりやアそれで宜いいんです、それを縁に金を貰おうの、お前めえさんの家うちに厄介やつけいになろうのとは申しません、私は是まで通り指物屋でお出入を致しますから、只親ひとことだと一言云つておくんなせえ」

と袂すがたに縋すがるを振払い、

幸「何をするんだ、放さねえと家主いえぬしへ届けるが宜いか」

と云われて長二が少し怯むを、得たりと、お柳を表へ連れ出さうとするを、長二が引留めようと前へ進む胸の辺を右の手で力にまかせ突倒して、

幸「さア疾く」

とお柳の手を引き、見返りもせず柳島の方へ急いでまいります。

後影うしろかげを起上りながら、長二が恨めしうに見送つて居ります

たが、思わず跣足はだしで表へ駈出し、十間ばかり追掛おっかけて立止り、向

うを見詰めて、何か考えながら後歩あとじさりして元の上り口あがに戻り、

ドツサリ腰をかけて溜息つを吐き、

長「ハア―廿九年前めえに己なけを藪なけ中へ棄てた無慈悲な親だが、会

つて見ると懐かしいから、名告つてもれえてえと思つたに、まだ

邪慳を通して、人の事を氣違だの騙りだのと云つて明かしてくれねえのは何処までも己を棄てる了簡か、それとも己の思違いで本当の親じやア無いのか知らん、いゝや左様で無え、本当の親で無くつて彼様なことをいう筈は無い、それに五十両という金を……おゝ左様だ、彼の金は何うしたか」

と内に這入つて見ると、行灯の側に最前の金包がありますから、

長「やア置いて行つた……此の金を貰つちやア済まねえ、チョツ忌々しい奴だ」

と独言を云いながら金包を手拭に包んで腹掛のどんぶりに押込み、腕組をして、女と一緒にだからまだ其様に遠くは行くまい、

田圃径たんぼみちから請地うけちの堤どてづた伝つたいに先へ出越せば逢えるだろう、柳島
 まで行くには及ばねえと点頭うなずきながら、尻をはしよつて麻裏草履
 を突つかけ、幸兵衛夫婦の跡を追つて押上おしあげの方かたへ駈出しました。
 此方こちらは幸兵衛夫婦丁度霜月九日の晩で、宵から陰くもる雪催しに、正
 北風たらいの強い請地どての堤どてを、男は山岡頭巾をかぶり、女はお高祖頭巾
 に顔を包んで柳島へ帰る途中、左右を見返り、小声で、

幸「此方こつちの事を知らせずとも、余所ながら彼あれを取立て、やる思
 案もあるから、決して気けぶりにも出すまいぞと、あれ程云つて置
 いたに、余計なことを云うばかりか、己にも云わずに彼様あんな金を
 遣つたから覚さとられたのだ、困るじゃアねえか」

柳「だつてお前さん、現在我子と知れたのに打棄うちちやつて置くこと

は出来ませんから、名告らないまでも彼を棄てた罪滅しに、

彼のくらしいの事はしてやらなければ今日様へ済みません」

幸「エ、まだ其様なことを云つてるか、過去つた昔の事は仕方がねえ」

柳「まだお前さんは彼を先の旦那の子だと思つて邪慳になさるのでございますね」

幸「馬鹿を云え、そう思うくらいなら彼様に目をかけてやりはしない」

柳「だつて先刻なんぞア酷く突倒したじやアありませんか」

幸「それでも今彼に本当のことを知られちゃア、それから種々な面倒が起るかも知れないから、何処までも他人で居て、子のよ

うにしようと思うからの事だ……おゝ寒い、斯こ様な所で云合つた
 ツて仕方がない、速く帰つて緩ゆっくり相談をしよう、さア行こう」
 と、お柳の手を取つて歩き出そうと致しまする路みち傍ばたの枯かれ蘆あし
 をガサ／＼と搔分けて、幸兵衛夫婦の前へ一人の男が突つ立たちま
 した。是は申さないでも長二ということ、お察しでございませよ
 う。

十八

請地の土手伝いに柳島へ帰ろうという途中、往ゆき来きも途絶えて物
 淋しい所へ、大の男がいきなりヌツとあらわれましたので、幸兵

衛はぎよつとして遁げようと思いましたが、女を連れて居りますから、度胸を据えてお柳を擁いながら、一一足三足後退して、

幸「誰だ、何をするんだ」

長「誰でもございませぬ長二です」

幸「ム、長二だ……長二、手前何しに来たんだ」

長「何しに来たとはお情ねえ……私は九月の廿八日、背中の傷

を見せた時、棄てられたお母さんだと察したが、奉公人の前があ

るから黙つて帰つて、三月越しお前さん方の身上を聞糺して、

確に相違無えと思うところへ、お二人で尋ねて来てくださったの

は、親子の名告をしてくんなさるのかと思つたら、それで無えか

ら我慢が出来ず、私の方から云出したのが気に触つたのか、但し

は無慈悲を通す気か、氣違だの騙りだのと人に悪名あくみょうを付けて
 帰けえつて行くような酷むごい親達から、金なんぞ貰う因縁が無えから、
 先刻さつきの五十両を返けえそうと捷徑ちかみちをして此処こゝに待受け、おもわず聞
 いた今いまの話、もう隠す事ア出来ねえだろう、お母さん、何うかお
 前めえさんに云い難にくい事があるかア知りませんが、決して他ひとには云わ
 ねえから、お前めえを産うんだお母ふくろだといつてくだせい……お願ねがいです
 ……また旦那は私の本当のお父とつさんか、それとも義理のお父さん
 か聞かしてください」

と段々幸兵衛の傍そばへ進んで、袂たもとに縋すがる手先を幸兵衛は振ふ払いま
 して、

幸「何をしやアがる氣違奴め……去年谷中の菩提所で初めて会っ

た指物屋、仕事が上手で心がけが奇特きせきだといふので、
仕事させ、過分な手間料を払ってやれば附けあがり、
途方もねえ言いが、りをして金にする了簡りょうかんだな、
其様そのんな事に慥びくともする幸兵衛じゃア無ねえぞ……え、何を
するんだ、放せ、袂たもとが切きるア、放さねえと打ぶ擲なぐるぞ」

と拳を振上げました。

長「打ぶつなら打ちなせえ、お前めえさんは本当の親じゃアねえか知らねえが、お母つかさんは本当のお母さんだ……お母さん、何故私わっちを湯河原へ棄てたんです」

とお柳の傍へ進もうとするを、幸兵衛が遮やせぎりながら、幸「何をしやアがる」

と云いさま拳固で長二の横よこつら面を殴りつけました。そうでなく
 ツても憎い奴だと思つてる所でございますから、長二は赫かつと怒いか
 まして、打つた幸兵衛の手を引ひとらえまして、

長「打ぶちやアがったな」

幸「打たなくツて泥坊め」

長「何だと、何時己が盗ぬすつと人をした」

幸「盗人だ、此こん様な事を云いかけて己の金を奪とろうとするのだ」

長「金が欲ほしいくれえなら、此の金を持って来きやアしねえ、汝うぬの
 ような義理も人情も知らねえ畜生の持けがらつた、穢けがらわしい金は要いらね
 え、返けえすから受取つておけ」

と腹掛のかくしから五十両の金包を取出し、幸兵衛に投付ける

と額あたまに中りましたから堪りません、金の角で額ぶちきが打切れ、血が流れる痛さに、幸兵衛は益々おこ怒つて、突いきなり然長二を衝つきたお倒して、土足で頭を蹴ましたから、砂埃が眼に入つて長二は物を見る事が出来ませんが、余りの口惜くやしさに手探りで幸兵衛の足を引ひつとら捉えて起上り、

長うぬ「汝うぬ蹴やアがツたな、此の義理知らずめ、最もう合点がつてんがならねえ」

と盲めくらなく擲なりて拳固を振廻すを、幸兵衛は右に避よけ左に躲かわし、空くうを打たして其の手を捉え捻ねじあげ上るを、そうはさせぬと長二は左を働かせて幸兵衛の領えりくび頸くびを掴み、引倒そうとする糞力に幸兵衛は敵かないませんから、挿さして居ります紙かみいれどめ入留の短刀を引抜いて切

払おうとする白刃しらばが長二の眼先へ閃ひらめいたから、長二もぎよツとしました。敵手あいてが刃物を持って居るのを見ては油断が出来ませんから、幸兵衛にひしと組付いて、両手を働かせないように致しました。

十九

長「その刃物は何だ、廿九年前めえに殺そうと思つて打棄うちやつた己が生きて居ちやア都合が悪いから、また殺そうとするのか、本当の親の為になる事なら命は惜まねえが、実子と知りながら名告もしねえ手前てめえのような無慈悲な親は親じやアねえから、命はやられね

え……危ねえ」

と刃物を※取もぎとろうとするを、渡すまいと揉合もみあう危なさを見かねて、お柳は二人に怪我をさせまいと背後うしろへ廻まわつて、長二の領えりもと元を掴み引分けんとするを、長二はお柳も己を殺す気か、よくも揃そろつた非道な奴らだと、かつと逆上のぼせて気も顛てんどう倒、一生懸命になつて幸兵衛が逆手さかてに持もつた刃物の柄つかに手をかけて、引奪ひったくろうとするを、幸兵衛が手前へ引く機はずみに刀きつさき尖深く我と吾手わがてで胸先を刺さしつらぬ

貫貫き、アツと叫んで仰向けに倒れる途端に、刃物は長二の手に残り、お柳に領を引かるゝまゝ将棋倒しにお柳と共に転んだのを、肩息ながら幸兵衛は長二がお柳を組伏せて殺すのであろうと思ひましたから、這寄つて長二の足を引張る、長二は起上りなが

ら幸兵衛を蹴飛ばす、後からお柳が組付くを刃物で払う刀尖が小
 髻を掠つたので、お柳は驚き悲しい声を振り擽って、

柳「人殺しイ」

と遁出すのを、もう是までと覚悟を決めて引戻す長二の手元へ、
 お柳は咬付き、刃物を奪ろうと揉合う中へ、跟きながら幸兵衛が
 割つて入るを、お柳が氣遣い、身を楯にかばいながら白刃の光を
 あちらこちらと避けましたが、とうとうお柳は乳の下を深く突か
 れて、アツという声に、手負ながら幸兵衛は、

幸「おのれ現在の母を殺したか」

と一生懸命に組付いて長二の髻の毛を引掴みましたが、何を
 申すも急所の深手、諸行無常と告渡る浅草寺の鐘の音を冥府へ

苞つとに敢あえなくも、其の儘息は絶えにけりと、芝居なれば義太夫ちよぼにとつて語るところです。さて幸兵衛夫婦は遂に命を落しました。其の翌日、丁度十一月十日の事でございます。回向院前の指物師清兵衛方では急ぎの仕事があつて、養子の恒太郎が久次留きゆうじとめきち吉などという三四名の職人を相手に、夜延よなべ仕事をしておる処へ、慌あわてゝ兼松が駈込んでまいりまして、

兼「親方は宅うちかえ」

恒「何だ、恟びつくりした……兼か久しく来なかつたのう」

兼「長兄あにいは来きやしねえか」

恒「いゝや」

兼「はてな」

恒「何うしたんだ、何か用か」

兼「聞いておくんなせえ、私がね、六間堀の伯母が塩梅がわり
いので、昨日見舞に行つて泊つて、先刻歸つて見ると家が貸店
になつてるのサ、訳が分らねえから大屋さんへ行つて聞いてみる
と、兄が今朝早く来て、急に遠方へ行くことが出来たからツて、
店賃を払つて、家の道具や夜具蒲団は皆な兼松に遣つてくれると
云置いて、何処かへ行つてしまったのサ、全体何うしたんだろ
う」

恒「そいつは大変だ、あの婆さんは何うした」

兼「婆さんも居ねえ」

久「それじゃア長兄と一緒に駈落をしたんだ、彼の婆さん、なか／＼色気があつたからなア」

恒「馬鹿アいうもんじゃアねえ……何か訳のあることだろうがナア兼……婆さんの宿へ行つて様子を聞いて見たか」

兼「聞きやアしねえが、隣の内儀おかみさんの話に、今朝婆さんが来て、親方が旅に出ると云つて暇をくれたから、田舎へ帰けえらなけりやアならねえと云つたそうだ」

恒「其そん様な事なら第一でえいちばん番に此方こつちへいさだ」

兼「己そも左様さうだと思つたから聞きに来たんだ、親方にも断らず

に旅に出る筈アねえ」

留「女房の置去という事アあるが、此奴ア妙だ、兼手前は長兄に嫌われて置去に遭つたんだ、おかしいなア」

兼「冗談じゃアねえ、若え親方の前だが長兄に限つちやア道楽で借金があるという訳じゃアなし、此の節ア好い出入場が出来て、仕事ア忙がしいので都合も好い訳だのに、夜遁のような事をする」とア合点がいかねえ……兎も角も親方に会つて行こう」

と奥へ通りました。奥には今年六十七の親方清兵衛が、茶微塵松坂縞の広袖に厚綿の入つた八丈木綿の半纏を着て、目鏡をかけ、行灯の前で其の頃鍛冶の名人と呼ばれました神田の地蔵橋の國廣の打つた鑿と、浅草田圃の吉廣、深川の田安

前の政鍛冶の打った二挺の鉤の研上げたのを検て居ります。年のせいで少し耳は遠くなりましたが、気性の勝った威勢のいゝ爺さんでございます。兼松は長二の出奔を甚く案じて、気が急きますから、奥の障子を明けて突然に、

兼「親方大変です、何うしたもんでしよう」

清「えゝ、何だ、仰山な、静かにしろえ」

兼「だつて親方私の居ねい留守に脱出しちまつたんです」

清「それ見ろ、彼様にいうのに打様を覚えねえからだ、中の

釘は真直に打つても、上の釘一本をありに打ちせえすりやア留

の離れる気遣えは無いというのだ……杉の堅木か」

兼「まあ堅気だ、道楽をしねえから」

清 「大きいもんか」

兼 「私わっちより少し大きい、たしか今年廿九だから」

清 「何を云うのかさっぱり分らねえ、己おらア道具の事を聞くのだ」

兼 「ム、道具ですか道具は悉すっかり皆家具蒲団まで私わっちにくれて行つ

たんです」

清 「まだ分らねえ……棚か箱か」

兼 「へい、店たなは貸店になつちまつたんです」

清 「何だと菓子棚だ、ウム菓子箆笥のことか、それが何うしたんだと」

兼 「何うしたんか訳が分らねえから聞きに来たんだが、親方へ談はなしなしだとねえ」

清「そりやア長二が為^する事だものを、一々己^{おれ}に相談する事アねえ」

兼「だツて、それじやア済まねえ、己^{おら}ア其様^{そん}な人トア思わなかつた……情^{なさけ}ねえ人だナア」

清「手前^{てめえ}何か其の仕事の事で長二と喧嘩でもしたのか」

兼「いゝえ、長^{なげ}え間助^{すけ}に行つてるが、喧嘩どころか大きい声をして呼んだ事もねえ……己^{おれ}を可愛がつて、近所^{きょう}の人が本当の兄^{きょう}

弟^{でえ}でも彼^あアは出来ねえと感心しているくれえだのに、己^{おれ}が六間堀へ行つてる留守に黙つて脱出^{ぬけだ}したんだから、不思議でならねえ」

清「何も不思議アねえ、手前^{てめえ}の技^{うで}が鈍いから脱出したんだ、長二は手前に何も云わねいのか」

兼「何とも云いませんので」

清「はてな、彼様あんなに親切な長二が教えねえ事アねえ筈だが……

何か仔細しせいのある事だ」

と腕組をして暫らく思案をいたし、

清「些すこし心当りがあるから明日あしたでも己が尋ねてみよう」

兼「左様そうです、何か深いわけがあるんです、心当りがあるんな

ら何も年寄の親方が行くにヤア及びません、私わっちが尋ねましょう」

清「手前てまえじゃア分らねえ、己が聞いてみるから手前今夜けえ帰つた

ら、長二に明日あす仕事の隙すきを見て一寸ちよつと来てくれると云つてくんな」

兼「親方何を云うんです、家うちに居もしねえ長兄に来てくれると

ア」

清 「何処へ行つたんだ」

兼 「何処かへ身を隠したから心配しんぺいしているんだ」

清 「何だと、長二が身を隠したと、え、そんなら何故速くそ
う云わねえんだ」

兼 「先刻さつきから云つてるんです」

清 「先刻からの話ア釘の話じゃアねえか」

兼 「道理で訝おかしいと思つた……困るな、つんぼ……エ、ナニ

あの遠方へ急に旅立をすると、家主の所とけえ云置いて、何処へも沙
汰なしに居なくなつちまつたんです」

清 「急に旅立をしたと、それにしても己の所とけえ何とか云いそう
なもんだ、黙つて行く所をもつて見りやア、何か済なんまねえ事でも

したんだらうが、彼奴あいつに限つちやア其様そんな事アあるめいに」

と子供の時から丹誠をして教えあげ、名人と呼ばれるまでになつて、親方を大切に思う長二の事ですから、清兵衛は養子の恒太郎よりも長二を可愛がりました、五六日も顔を出しませんと直すに案じて、小僧に様子を見せにやるといふ程でございますから、駈落同様の始末と聞いて清兵衛は顔色の変るまでに心配をいたして居ります。

二十一

恒太郎も力と頼む長二の事ですから、心配しながら兼松を呼び

に来て見ると、養父が心配の最中でありますから、

恒「兼、手前てめえ……長兄のことを父さんとつに云つたな、云わねえでも宜いに……父さん案じなくつても宜いよ、長二の居る処は直すぐに知れるから」

清「手前てめえ長二の居る処を知つてるのか」

恒「大ていげえ概分つてるから、明日あした早く捜しに行こう」

清「若わえから何どん様な無分別を出すめいもんでもねえから、明日あすといわず早いわが宜い、兼と一緒に今ツから捜しに行きな」

と急せき立てる老おいの一徹、性急なのは恒太郎もかね／＼知つて居りますが、長二の居い所が直いとこに分ると申しましたのは、只年寄に心配をさせまいと思つての間に合せてございますから、大きに当

惑をいたし、兼松と顔を見合せまして、

恒「行くのあわけアねえが、今夜はのう兼」

兼「そうサ、行つて帰ると遅くならア親方、明日あした起きぬけに行

きましよう」

清「其そん様なことを云つて、今夜の内に間違まちげえでもあつたら何うする」

兼「大丈夫でえじようぶだよ」

清「手前は受合つても、本人が出て来て訳の解らねえうちは、
己おらア寝ても眠ねられねえから、御苦労だが早く行つてくんねえ」

と急立せきたてられました、恒太郎は余儀なく親父の心を休めるため

に

恒「そんなら兼、行つて来よう」

と立とうと致します時、勝手口の外で

「若^{わけ}え親方も兼公も行くにやア及ばねえ」

と声をかけ、無^{ぶえんりよ}遠慮に腰障子を足でガラリツと押開け、どつ

こいと躓^{よろめ}いて入りましたのは長二でございます。結城木綿の二枚

布衣^{ぬのこ}に西川縞の羽織を着て、盲縞の腹掛股引に白足袋という拵^{こしらへ}え

で新しい麻裏草履^{つっ}を突かけ、何所^{どこ}で奢^{さか}つて来たか笹^さ折^{おり}を提^さげ、

微^{ほろえい}酔^い機嫌で楊枝を使いながらズツと上つて来ました様子が、平^ふ

常^{だん}と違いますから一同は恟^{おどろ}りして、

兼「兄い、何うしたんだ、何処へ行つてたんだ、己^{おら}ア心^{しん}配^{ぺい}し

たぜ」

長「何処へ行こうと己おれが勝手だ、心配しんぺいするやつが間拔だ、ゲエープウー」

兼「やア珍らしい、兄い酔ってるな」

長「酔おうが酔うめえが手前てめえの厄介になりアしねえ、大きにお

世話だ黙っている」

と清兵衛の前に胡座あぐらをかいて坐りました。

兼「何だか変だが、兄いが何うかしたぜ、コウ兄い……人にさ
ん／＼しんぺい心配をさせておいて悪体あくていを吐つくとア酷ひどいじゃアねえか」
長「生意気なことを吐ぬかしゃアがると打たき擲なぐるぞ」

兼「何が生意気だ、兄いくと云やア兄いぶりアがって、手て
前めえこそ生意気だ」

と互に云いつのりますから、恒太郎が兼松を控えさせまして、

恒「コウ長二、それじゃアおとなしくねえ、手前てめえが居なくなつたツて兼が心配しんぺいしているのに、悪体あくてえを吐くつのア宜よくねえ、酔よっているかア知らねえが、此処こゝで其様そんなことをいっちやア済むめえぜ」

長「え、左様そうです、私わちが悪わるかつたから御免ごめんなせえ」

恒「何も謝あやまるには及およばねえが、聞ききやア手前てめえ家を仕舞しりつたそうだが、何処どこへ行く積しりだ」

長「何処どこへ行いこうとお前めえさんの知しつた事ことちやアねえ」

と上目かみめで恒太郎の顔かほを見る。血相ちっそうが變かつていて、氣味きみが悪わるうございますから、恒太郎が後あと 遼じさりをうしろする後あとに、最前さいぜんから様子ようすを

見て居りました恒太郎の嫁のお政が、湯呑に茶をたっぷり注いで持ってまいりました。

二十二

政「長さん、珍しく今夜は御機嫌だねえ：お前さんの居る所が知れないと云って、お父さんや皆が何様に心配をしていたか知れないよ」

と茶を長二の前に置いて、

政「温いからおあがり、お夜食は未だぐろうね、大澤さんか
ら戴いた鰯が味噌漬にしてあるから、それで一膳おたべよ」

長「え、有がとうがすが、今喰ったばかりですから」

と湯呑の茶を載いて、一口グツと飲みまして、

長「親方……私は遠方へ行く積りです」

清「其様なことをいうが、何所へ行くのだ」

長「京都へ行って利齋の弟子になる積りで、家をしまつたので

す」

清「それも宜いが、己も先の利齋の弟子で、毎も話す通り三年

釘を削らせられた辛抱を仕通したお蔭で、是までになつたのだか

ら、今の利齋ぐれえにやア指す積りだが……む、あの鹿島さんの

御注文で、島桐の火鉢と桑の棚を拵えたがの、棚の工合は自分

でもよく出来たようだから見てくれ」

と目で恒太郎に指図を致します。恒太郎は心得て、小僧の留吉と二人で仕事場から桑の書棚を持出して、長二の前に置きました。清「どうだ長二……この遠州透は旨いだらう、引出の工ぐ合あなぞア誰にも負けねえ積りだ、これ見ろ、此の通りだ」と抜いて見せるを長二はフンと鼻であしらいました、

長「成程拙ますくアねえが、そんなに自慢をいう程の事もねえ、此の遣違やりちげえの留とめと透すかしの仕事は嘘だ」

兼「何だと、コウ兄い……親方の拵こせえたものを嘘だと、手前慢てめえ心でもしたのか」

長「馬鹿をいうな、親方の拵えた物だつて拙いのもあらア、此の棚は外見うわべは宜いいが、五六年経つてみねえ、留はなが放はなれて道具にや

アならねえから、仕事が嘘だというのだ」

恒「何だと、手前父さんの拵えた物ア才槌で一つや二つ擲つたつて毀れねえ事ア知ってるじやアねえか」

長「それが毀れる様に出来てるからいけねえのだ」

恒「何うしたんだ、今夜は何うかしているぜ」

長「何うもしねえ、毎もの通り真面目な長二だ」

恒「それが何故父さんの仕事を誹すのだ」

長「誹す所があるから誹すのだ、論より証拠だ、才槌を貸しねえ、打毀して見せるから」

恒「面白い、毀してみろ」

と恒太郎が腹立紛れに才槌を持って来て、長二の前へ投げ出

したから、お政は心配して、

政「あれまアおよしよ、酔つてるから堪忍おしよ」

恒「酔つてるかア知らねえが、余りだ、手前の腕が曲るから毀してみろ」

兼「若え親方……腹も立とうが姉さんのいう通り、酔つてるのだから我慢しておくんなせえ、不断此様な人じやアねえから、私が連れて帰つて明日詫に來ます……兄い更けねえうちに帰ろう」

と長二の手を取るを振払いまして、

長「何ヨしやがる、己ア無宿だ、帰る所アねえ」

と云いながら才を取つて立上り、恒太郎の顔を見て、

長「今打ち毀して見せるから其方へ退いていなせい」

と才槌ひっさを提ひげて、蹠よろめく足を踏ふみしめ、棚あんどの側へ摺寄あんどつて行
 灯うの蔭かげになるや否いなや、コツン／＼と手て疾はやく一ふた槌つちばかり当あてる
 と、忽くち釘ぎ締じめめの留とどめは放はなれて、遠州透あたりはばら／＼になつて四辺あたり
 へ飛散ありました。

二十三

言葉ことばの行ゆき掛がりりから彼あアはいうものゝよもやと思おもつた長二ながにが、
 遠慮えんりょもなく清兵衛せいべゑの丹誠たんせいを尽つくした棚たなを打毀ぶちこわしました。且かつ二つや三
 つ擲なつたつて毀これる筈はずのない棚たながばら／＼に毀これたのに、居合いあわ
 す人ひと々は驚おどきました。中なかにも恒太郎つねたろうは長二ながにが余あまりの無作法むさくさに赫かつと

怒いかつて、突いきなり然長二の髻たぶさを掴んで仰向に引倒し、拳骨で長二の頭を五つ六つむ続けさまに打擲ぶんなくりましたが、少しもこたえない様子で、長二が黙ぶつて打たれて居りますから、恒太郎は燥いらだ立ちて、側に落ちてゐる才槌を取つて打擲ろうと致しますに、お政が驚いて其の手に縋すがりついて、

政「あれまア危ないからおよしよ、怪我をさせては悪いからサ兼松……速く留めておくれ」

兼「まアお待ちなせえ、其そん様な物で擲なつちア大変だ」と止めるのを恒太郎は振おひまして。

恒「なに此の野郎、ふぎけて居やがる、此の才槌せえづちで柵せきを毀こわしたから己が此の野郎の頭ぶちこわを打毀してやるんだ」

と才槌を振り上げました。此の騒ぎを最前から黙って視て居りました清兵衛が、

清「恒マア待て、よしねえ、打棄うっちゃつておけ」

と留めましたが、恒太郎はなか／＼肯ききません。

恒「それだツて此こんな様に毀してしまつちやア、明日鹿島あしたかしまさんへ納める事が出来ねえ」

清「まア己が言訳をするから宜いいというに」

と叱りつけましたので、恒太郎、余儀なく手を放したから、お政も安心して長二を引起しながら、

政「何処も痛みはしないか、堪忍おしよ」

長「へい、有がとうがす」

と会釈をして坐り直す長二の顔を、清兵衛がジツと視まして、

清「これ長二手前てめえ能く吾の拵おれえた棚を毀したな、手前は大層上手になった、己の仕事に嘘があるとは感心だ、何処に嘘があるか手前の気の付いた所を一々其処で云つて見ろ」

長「へい、云えというなら云いますが、此の広い江戸で清兵衛と云やア知らねえ者のねえ指物師の名人だが、それア二十年も前めえのこのことだ、もう六十を越して眼も利かなくなり、根気も脱ぬけて、

此の頃ア板いたけずり削あらまで職人にさせるから、艶つやが無くなつて何処となしに仕事あつちが粗ざびで、見られた状さまアねえ、私わちちが弟子に來た時分は釘一本他手ひとてにかけず、自分で夜延よなべに削つて、精神たましいを入れて打ちなえさつたから百年経つても合え口の放いれくちッちは無なかつたが、今いじ

やア此のからツペたの恒兄あにいに削らせた釘を打ちなざるから、此ん
通りで状さまア無い、アハ、ハ、

と打毀した棚に指をさして嘲笑あざわらいますから、兼松は氣を揉ん
で、長二の袖をそつと引きまして、

兼「おい兄い何うしたんだ、大概ていげえにしねえ」

と涙声で申しますが、一向に頓とんじやく着やくいたしません。

長「才せえづち槌で二つや三つ擲つて毀れるような物が道具になるか、
大概ていげえ知れた事ことた、耄碌しちやア駄目だ」

と法外な雑言ぞうごんを申しますから、恒太郎が堪こたえかねて拳骨を固
めて立かゝろうと致しますを、清兵衛が睨にらみつけましたから、齒は
軋ぎしりをして扣ひかえて居ります。

長「その証拠にやア十年前私に何と云いなすつた、親方忘れや
 しないだろう、箱というものは木を寄せて拵こせえるものだから、暴あら
 くすりア毀れるのがあたりめえ当あ然ただ、それが幾ら使つても百年も二百
 年も毀れずに元のまんまで居るといふのは外じやアねえ、釘の削
 するからの事だ、精神を入れるといふのは外じやアねえ、釘の削
 り塩梅から板の拵えぐえい工合と釘の打ち様にあるんだ、それだから釘
 一本他ひとに削らせちやア自分の精神が入らねえところが出来て、道
 具が死んでしもうのだ、死んでる道具は直に毀れツちまうと云つ
 たじやアありやせんか、其の通りしねえから此の棚の仕事は嘘だ
 と云うのだ、此こんな様に直ぐ毀れる物を納めるのてえア注文先へ対して不
 実ふというものだ、是で高い工く手間てまを取ろうとは盗ぬすつと人より太ふえ了

簡だ」

と止途なく罵ります。

二十四

清兵衛も腹にすえかね、

清「黙りやアがれ、馬鹿野郎め、生意気を吐しやアがると承知しねえぞ、坂倉屋の仏壇で名を取ったと思つて、高言を吐きアがるが、手前がそれほど上手になつたのア誰が仕込んだんだ、其の高言は他へ行つて吐くが宜い、己の目からはまだ板挽の小僧だが、己を下手だと思ふなら止せ、他に對つて己の弟子だといふな

「よ」

長「さア、それだから京都へ修業に行くのだ、親方より上手な師匠を取る気だ」

恒「呆れた野郎だ、父とつさん何うしよう」

兼「正気でいうのじやアねえ」

清「気きちげえ違ちがえだろ、其そん様な奴やつに構かまうなよ」

兼「おい、兄あにい、どうしたんだ、本当に気でも違ちがつたのか」

長「べらぼうめ、気が違ちがつてたまるもんか、此こん様な下手な親方に附ついていちやア生しょうげえ涯げえ仕事の上りツこがねえから、己おのの方かたから断ことわるんだ」

清「長二、手前てめえ本当に其様なことをいうのか」

長「嘘を吐いたツて仕方がねえ、私が京都で修業をして名人になツたつて、己の弟子だと云わねえように縁切の書付をおくんなせえ」

清「べらぼうめ、手前のような奴ア、再び弟子にしてくれろと云つて来ても己の方からお断りだ」

長「書付を出さねえなら、此方で書いて行こう」

と傍にある懸硯箱かけすゞりばこを引寄せて鼻紙に何か書いて差出しましたから、清兵衛が取上げて見ますと、仮名交りで、

一私わたくし是まで親方のおせわになつたが今日こんにち日あいそが付きたから

縁を切ります然る上は親方でないあかの他人で何事も知らな

いから左様おぼしめし被下候くだされそう

文政巳^み十月十日

長二郎

箱^{はこ}清^{せい}様

とありますから清兵衛は変に思つて眺めておりますを、恒太郎が横の方から覗き込んで、

恒「馬鹿な野郎だ、弟子のくせに此様な書付を出すとア……おや、長二は何うかしているんだ、今月ア霜月だのに十月と書いてあるア、月まで間違^{まちが}えていやアがる」

長「そりやア知つてるが、先月から愛想が尽きたから、そう書いたんだ」

恒「負^{まけ}惜^{おし}みを云やアがるな、此様な書付を張つたからにやア

二度と再び家の敷居を跨ぎやアがると肯かねいぞ」

長「そりやア知れた事た、此の書付を渡したからにやア此家に
何んな事があつても己ア知らねえよ、また己の体に何様な間違え
があつても御迷惑アかけねえから、御安心なせいやし」

と立上つて帰り支度を致しますが、余りの事に一同は呆れて、
只互いに顔を見合すばかりで何にも申しませんから、お政が心配
をして、長二の袂を引留めまして、

政「長さんお待ちよ……まアお待ちというのに、お前それでは
濟まないよ、よもやお忘れではあるまい、廿年前の事を、私は其
の時十三か四であつたが、お前がお母に手を引かれて宅へ来た時
に、私のお母さんがマア十や十一で奉公に出るのは余り早いじゃ

アないかと云つたら、お前何とお云いだ、お母ふくろがとる年で、賃仕事をして私を育てるのに骨が折れるから、早く奉公をして仕事を覚え、手間を取つてお母に楽をさせたいとお云いだつたらう、お母さんがそれを聞いて、涙をこぼして、親孝行な子だ、そういう事なら何どの様にも世話をしよう云つて、自分の子のように可愛がつたのはお忘れじゃアなからう、また其の時お前の名は二助と云つたが、伊助という職人がいて、度々たび／＼間違うからお父とつさんが長い手の人ひと指ゆびが長くつて中指と同じのを御覧なすつて、人指の長い人は器用で仕事が上手になるものだから、指が二本とも長いというところで長二としよう、京都の利齋親方の指も此の通りだ

から、此の小僧も仕立てようで後には名人になるかも知れないと
 云つて、他の職人より目をかけて丁寧^{ていねい}に仕事を教えてくださった
 ので、お前斯うなつたのじゃアないか、それに又お前のお母が歿^{なく}
 した時、お父さんや清五郎さんや良^{うちのひと}人で行つて、立派に葬^{ともら}
 式を出して上げたろう、お前は其の時十七だつたが、親方のお
 蔭で立派に孝行の仕納めが出来た、此の御恩は死んでも忘れない
 と涙を流してお云いだというじゃアないかね、元町へ世帯^{しよたい}を持
 つ時も左様^{そう}だ、寝道具から膳^{みん}椀まで皆なお前お父さんに戴いたの
 じゃアないか、此様なことを云つて恩にかけるのじゃアないが、
 お前左様という親方を袖にして、自分から縁切の書付を出すとは何
 うしたものだえ、義理が済むまいに、お前考えてごらん、多くの

弟子の中で一番親方うち思いと云われたお前が、此様な事になるとは私にはさっぱり訳が分らないよ」

二十五

政 「恒兄に擲ぶたれたのが腹が立つなら、私が成代なりかわって謝るからね、何だね、子供の時から一つ処とこで育った心安だてが過ぎるからの事だよ、堪忍おしよ、お父さんもお年がお年だから、お前でもないよと良人うちのひとが困るからよ、お父さんへは私がお詫をするから、長さんマアちゃんとお坐んなさいよ、何うしたのだねえ」

と涙を翻こぼしてなだめまする信実のぶみに、兼松も感じて鼻をすゝりな

がら、

兼「コウ兄い、いま姉あねさんもいう通りだ、親方の恩は大抵こつの事
 ちやアねえ、それを知らねえ兄いでもねえに、何うしたんだ、何なん
 か人にしやくられでもしたのか、え、姉さんが心しんぺい配するから、
 おい兄い」

長「お政さん御親切は分りやしたが、弟子師匠の縁が切れてみ
 りやア詫わび言ことをする訳もねえからね、人は老ろう少しょう不定ふじょうで、年を
 とつた親方いゝや、清兵衛さんより私わっちの方が先へ往いくかも知れま
 せんから、他ひとを当あてにするのア無駄だ、何でもてんでに稼とぐのが一
 番だ、稼いで親に安心をさせなざるが宜いい、私の体どんに何様な事が
 あろうと、他人だから心しんぺい配なせいやすな……兼、手前てめえとも最もう

兄きょうでい 弟 じゃアねえぞ」

と云放つて立上り、勝手口へ出てまいりますから、お政も呆れまして、

政「そんなら何うでもお前は」

長「もう参りません」

清「長二」

長「何なんか用かえ」

清「用はねい」

長「左そう様だろう、耄碌爺には己も用はねえ」

と表へ出て腰障子を手荒く締切りましたから、恒太郎は堪こらえきれず、

恒「何を云いやがる」

と拳骨げんこを固めて飛出そうとするのを清兵衛が押止めまして、

清「打棄つておけ」

恒「だツて余あんまりだ」

清「いゝや左様でねえ、是には深い仔細わけのある事だろう」

恒「何様な仔細があるかア知らねえが、父とつさんの拵こせえた棚たぐを打

き毀して縁切の書付を出すア、話にならねえ始末だ」

清「それがサ、彼奴あいつ己こせの拵こせえた棚の外から三つや四つ擲つたツ

て毀れねえことを知ってるから、先刻さつき打擲ぶんなぐつた時、故わざツと行灯

の陰かげになつて、暗くれい所で内の方から打たきやアがったのは、無理に

己を怒らせて縁切の書付を取ろうと企たくんだのに相違ねえが、縁を

切つて何うするのか、十一月を十月と書いたのにも仔細しさいのある事
 だろう、二三日経つたら何か様子なんが知れようから打棄つておきね
 え」

と一同をなだめて案じながら寢床に入りました。其の頃南の町
 奉行は筒井和泉守ついでいずみのかみ様で、お慈悲深く御裁きが公平という評判
 で、名奉行でございました。丁度今月はお月番ですから、お慈悲
 のお裁きにあずかろうと公事訴訟が沢山に出ます。今日こんにち日は十一
 月の十一日で、追々白洲へ呼込みになる時刻に相成りましたから、
 公事の引合に呼出された者は五人十人と一ひとむれ群むれになつて、御承知
 の通り数寄屋橋内うちの奉行所の腰掛茶屋に集つていますを、やがて
 奉行屋敷の鉄網かなあみの張つてある窓から同心が大きな声をして、

「芝新門前町高井利兵衛貸金催促一件一同入りましよう」

など、呼込みますと、その訴訟の本人相手方、只今では原告被告と申します、双方の家主五人組は勿論、関係の者一同がごたくく白洲へ這入ります。此の白洲の入口の戸を締切る音ががら／＼ピシャーリツと凄すさまじく脳天に響けますので、大抵の者は仰天して怖くなりますから、嘘を吐くことが出来なくなつて、有ありてい体に白状をいたすようになるという事でございます。今大勢の者が白洲へ呼込みになる混雑の中を推おし分けて、一人の男が御門内へ駈込んで、当番所の前へ平伏いたしました。此の男は長二でございませ

当番所には同心いちにん一人と書役かきやく一人が詰めておりまして、

同「何だ」

長「へい、お訴えがございます」

同「ならない」

と叱りつけて、小者に門外もんそとへ逐出おいださせました。この駈込訴訟と申しますものは、其の筋の手を経て出訴しゅっそせいといって、三度までは逐返すのが御定法でございませうから、長二も三度逐出されましたが、三度目に、此の訴訟をお採上げとりあになりませんと私の一命いちめいに拘かわりませうと申したので、お採上げになつて、直に松右衛門まつえもん

の手で腰繩をかけさせまして入牢じゆうろうと相成り、年寄へ其の趣きを
 届け、一通り取調べて奉行附の用人へ申達しんたつして、吟味与力へ引
 渡し、下調したしらべをいたします、これが只今の予審で、それから奉
 行へ申立て、本調になるという次第でございます。通常の訴訟は
 出訴の順によつてお調べになります、駈込訴訟は猶予の出来な
 い急ぎの事件といつので、他の訴訟が幾許いくらあつても、それを後へ
 廻して此の方を先へ調べるのが例でありますから、奉行は吟味与
 力の申立てにより、他の調を後廻しにして、いよく長二の事件
 の本調をいたす事に相成りました。指物師清兵衛は長二が先夜の
 拳動ふるまいを常事たゞごとでないと勘付きましたから、恒太郎と兼松に言付
 けて様子を探らせると、長二が押上堤で幸兵衛夫婦を殺害せつがいした

と南の町奉行へ駈込かけこみ訴訟うたがえをしたので、元町の家主は大騒ぎで心配をして居るといふ兼松の注進で、さては無理に喧嘩けんかを吹かけて弟子師匠の縁を切り、書付の日附を先月にしたのは、恩ある己達を此の引合に出すまいとの心配であろうが、此の事を知つては打棄つて置かれない、何なんの遺恨で殺したのか仔細は分らないが、無闇な事をする長二でないから、お採上げとりあにならないまでも、彼奴あいつが親孝心の次第ふだんから平常の心がけと行いの善よい所を委くわしく書面に認しためて、お慈悲願ねがいをしなけりやア彼奴の志に対して済まないとは思いましたが、清兵衛は無筆で、自分の細工をした物の箱書はいつでも其の表に住居いたす相撲の行司で、相撲膏すもうこうを売る式守しきもり伊之助いのすけに頼んで書いて貰う事でありますから、伊之助に委細の

ことを話して右の願書を認めて貰い、家主同道で恒太郎が奉行所へお慈悲願に出ました。今日は龜甲屋幸兵衛夫婦殺害一件の本調といので、関係人一同町役人家主五人組差添で、奉行所の腰掛茶屋に待つて居ります。やがて例の通り呼込になつて一同白洲に入り、溜と申す所に控えます。奉行の座の左右には継肩衣をつけた目安方公用人が控え、縁前のつくばいと申す所には、羽織なしで袴を穿いた見習同心が二人控えて居りまして、目安方が呼出すに従つて、一同が溜から出て白洲へ列びきると、腰縄で長二が引出され、中央へ坐らせられると、間もなくシイ一という制止の声と共に、刀持のお小姓が随いて、奉行が出座になりました。

二十七

白洲をずうツと見渡されますと、目安方が朗かほがらに訴状を讀上げ
 る、奉行はこれを篤とくと聞き了りまして、
おわ

奉「浅草鳥越片町幸兵衛手代萬助まんすけ、本所元町與兵衛店恒太郎、

訴訟人長二郎並びに家主源八げんぱち、其の外名主代組合の者残らず出
 ましたか」

町「一同附添いましてござります」

奉「訴人うったえにん長二郎、其の方は何歳に相成る」

長「へい、二十九でござります」

奉「其の方当月九日の夜五つ半時、鳥越片町龜甲屋幸兵衛並に妻柳を柳島押上堤において殺害いたしたる段、訴え出たが、何故に殺害いたしたのじゃ、包まず申上げい」

長「へい、只殺しましたので」

奉「只殺したでは相済まんど、殺した仔細を申せ」

長「其の事を申しますと両親の恥になりますから、何と仰しやつても申上げる事は出来ません……何卒只人を殺しました廉で御処刑をお願い申します」

奉「幸兵衛手代萬助」

萬「へい」

奉「これなる長二郎は幸兵衛方へ出入をいたしおった由じやが、

何か遺恨を挟むさしはさような事はなかつたか、何うじや」

萬「へい、恐れながら申上げます、長二郎は指物屋でございませから、昨年の夏頃から度々たび／＼あつち誂え物をいたし、多分の手間代を払い、主人夫婦が格別鼻屑にいたして、度々長二郎の宅へも参りました、其の夜死骸の側に五十両の金包が落ちて居りましたのをもつて見ますと、長二郎が其の金を奪とろうとして殺しまして、何かに慌て、金を奪とらずに遁にげたものと考えます」

奉「長二郎どうじや、左様さようか」

長「其の金は私わたくしが貰つたのを返したので、金なぞに目をくれるような私じやアございません」

奉「然しからば何故に殺したのじや、其の方の為になる得意先の夫

婦を殺すとは、何か仔細がなければ相成らん、有体ありていに申せ」

恒「恐れながら申し上げます、長二は差上げました書面の通り、
私親共わたくしの弟子でございまして、幼少の時から親孝心で実直で、道
楽ということは怪我にもいたしませんで、余計な金があると正直
な貧乏人に施すくらいで、仕事にかけては江戸一番という評判を
取つて居りますから、金銭に不自由をするような男ではござりま
せんから、悪心があつてした事では無いと存じます」

源「申し上げます、只今恒太郎から申し上げます通り、長二郎は
六年ほど私店わたくしなうち内に住居いたしましたましたが只の一度夜宅うちを明けたこ
との無い、実体じつていな辛抱人で、店賃は毎月十日前に納めて、時々
釣いは宜いから一杯飲めなぞと申しまして、心こゝろ立だての優しい慈悲

深い性たちで、人なぞ殺すような男ではござりません」

萬「へい申上げます、私わたくし主人方で昨年わたくしの夏から長二に払いました手間料は、二百両足らずに相成ります、此の帳面を御覽を願います」

と差出す帳面を同心が取次いで、目安方が読上げます。

奉「この帳面は幸兵衛の自筆か」

萬「へい左様でございます、此の通り格別鼻屑にいたしました、主人の妻さいは長二郎に女房の世話を致したいと申して居りましたから、私わたくしの考えますには、其の事を長二郎に話しましたのを長二郎が訝おかしく曉さとつて、無礼な事でも申しかけたのを幸兵衛に告げましたので、幸兵衛が立腹いたして、身分が身分でございますから、

後あとで紛いさくさ紜ぎんの起らないように、出入留でいりどめの手切金を夫婦で持つてまいったもんですから、此の事が世間へ知れては外聞にもなり、殊に恋のかなわなくやしい口惜まぎ紛ぎれに、兩人を殺したんであろうかとも存じます」

奉「長二郎、此の帳面の通り其の方手間料を受取ったかそう而して柳が其の方へ嫁の口くにゆう入をいたしたか何うじや」

長「へい、よくは覚えませんが、其の位受取ったかも知れませんが、決して余計な物は貰やアしません、又嫁を貰えと云った事はありませんが、私わたくしが無礼なことを云いかけたなぞとは飛んでもない事でございます」

奉「それはそれで宜しいが、何故なぜ斯様に鼻屑はなづけになる得意の恩人

を殺したのじや、何ううらみいう恨か有体に申せ」

長「別に恨というはございませんが、只あの夫婦を殺したくない
りましたから殺したのでございます」

奉「黙れ……其の方天下の御ごはつと法度を心得ぬか」

長「へい心得て居りますから、遁にげ隠れもせずにお訴え申した
のでございます」

奉「黙れ……有体に申し上げぬは御法に背くのじや、こりや何じ
やな、其の方狂氣いたして居おるな」

恒「申上げます、仰せの通り長二郎は全く逆上のほせて居おると存じ
ます、平常ふだん斯ういう男ではございません、私親わたくし共は今年こんねん六十七
歳の老体で、子供の時分から江戸一番の職人にまで仕上げました

長二郎の身を案じて、夜も碌に眠りません程でございませぬによつて、何卒老体の親共を不便ふびんと思召して、お慈悲の御沙汰ごさたをお願い申します、全く氣違に相違ちがひございませぬから」

萬「成程氣違ちがひだらう、主ぬしのある女に無理を云いかけて、此方こつちで内証にしようと思ふのを肯きかずに、大恩のある出入場の旦那夫婦を殺すとア、正氣の沙汰ではございませぬまい」

奉「萬助……其の方の主人夫婦を殺害いたした長二郎は狂人で、前後の弁わきまえなくいたした事と相見えるが何うじや」

萬「へい、左様でございませぬよう」

奉「町役人共は何と思ふ、奉行は狂氣じやと思ふが何うじや」

一同「お鑑定めがねの通りと存じます」

とお受けをいたしました。仔細を知りませんから、長二が人を殺したのは全く一時発狂をいたしました事と思うたのでございまいしよ
うが、奉行は予て邸へ出入をする蔵前の坂倉屋の主人から、長二の身持の善き事と伎倆の非凡なることを聞いても居り、且長二が最初に親の恥になるから仔細は云えぬと申した口上に意味がありそうに思われますから悪意があつて、殺したので無いということは推察いたし、何卒此の名人を殺したく無いとの考えで取調べると、仔細を白状しませんから、これを幸いに狂人にして命を助けたいと、語を其の方へ向けて調べるのを、伶俐な恒太郎が呑込んで、氣違に相違ないと合槌を打つに、引込まれるとは知らず萬助までが長二を悪くする積りで、正氣の沙汰でないと申します

から、奉行は心の内で窃かに喜んで、一同に念を押しして、愈々狂人の取扱いにしようと思ひますと、長二は案外に立腹をいたしまして、両眼に血を濺ぎ、額に青筋を現わし拳を握りつめて、白洲の隅まで響くような鋭き声で、

長「御奉行様へ申し上げます」

と云つて奉行の顔を見上げました。

二十八

さて長二郎が言葉を更めて奉行に向いましたので、恒太郎を始め家主源八其の他の人々は、何事を云出すか、お奉行のお慈悲で

助命になるものを今さら余計なことを云つては困る、而て見ると愈々本当の氣違であるかとひとかた一方ならず心配をして居りますと、

長二は奉行の顔を見上げまして、

長「私は固より重い御処刑になるのを覚悟で、お訴え申しましわたくしもと

たので、又此の儘生延びては天道様へ済みません、現在親を殺

して氣違だと云われるを幸いに、助かろうなぞという了簡は毛頭

ございません、親殺しの私ですから、何卒御法通りお処刑をどうぞ願

い申します」

奉「フム……然らば幸兵衛夫婦を其の方は親と申すのかしか

長「左様でございます」

奉「何ういう仔細で幸兵衛夫婦を親と申すのじゃ、其の仔細を

申せ」

長「此の事ばかりは親の恥になりますから申さずに御処刑を受
けようと思いましたが、仔細を云わなけりやア氣違だと仰しやる
から、致し方がございません、其の理由わけを申上げますから、お聞
取りをお願い申します」

とそれより自分の背中に指の先の入る程の穴があるのを、こゝの
九歳の時初めて知って母に尋ねると、母は泣いて答えませんので、
自分も其の理由を知らずにいた処、去年の十一月職人の兼松と共
に相州の湯河原で湯治中、温泉宿へ手伝に來た婆さんから自分は
棄兒すてごであつて、背中の穴は其の時受けた疵である事と、長左衛門
夫婦は実まことの親でなく、実の親は名前は分らないが、斯々かくくし云

々々の者で、自分達の悪い事を掩おほわんがために棄てたのであると
 いう事を初めて知つて、実の親の非道を恨み、養い親の厚恩に感
 じて、養い親のため仏事を営み、菩提所の住持に身の上を話した
 時、幸兵衛に面会したのが縁となり、其の後種々の注文をして過
 分の手間料を払い、一方ひとかたならず鼻屑にして、度々尋ねて来る様
 子が如何にも訝おかしくあり、殊に此の四月夫婦して尋ねて来た時、
 お柳が急病を発おこし、また此の九月柳島の別荘で余儀なく身の上を
 話して、背中の疵を見せると、お柳が驚いて癩しやくを発した様子など
 を考えると、お柳は自分を産んだ実の母らしく思えるより、手を
 廻して幸兵衛夫婦の素性を探索すると、間違いなささうでもあり、
 また幸兵衛が菩提所の住持に自分の素性を委くわしく尋ねたとの事を

聞き、幸兵衛夫婦も自分を実子と思つては居れど、棄兒にした廉かど
 があるから、今さら名告りかね、余所ながら鼻眞にして親しむの
 に相違ないと思う折から、去る九日こゝのかの夕方ゆうかた夫婦して尋ねて来
 て、親切に嫁を貰えと勧め、その手当に五十両の金を遣るとい
 うので、もう間違ひはないと思つて、自分から親子の名告をして
 くと迫つた処、お柳は躰あらわれたと思ひ、悔りびつくして逃出そうとする、
 幸兵衛は其の事が知れては身の上と思つたと見え、自分を氣違だ
 の騙かたりだのと罵りのゝしこづきまわして、お柳の手を取り、逃歸つたが、
 斯こん様な人から、一文半錢たゞ貰いう謂いわれがないから、跡に残つてい
 た五十両の金を返そうと二人を逐おかけ、先へ出越して待つてい
 る押上堤で、図らずお柳の話まを聞き正ましく実の母親と知つたから、

飛出して名告つてくれと迫るを、幸兵衛が支えて、粗暴を働き、短刀を抜いて切ろうとするゆえ、これを奪い取ろうと悶着の際、兩人に疵を負わせ、遂に落命させしと、一点の偽りなく事の顛末を申し立てましたので、恒太郎源八を始め、孰れも大きに驚き、長二の身の上を案じ、大抵にしておけと云わぬばかりに、源八が窃と長二の袖を引くを、奉行は疾くも認められました、奉「こりや止むるな、控えておれ」

二十九

奉「長二郎、然らば其の方は全く両親を殺害致したのじやな」

長「へい……まあ左様そいう次第ではございませうが、幸兵衛とい

う人は本当の親か義理の親か未だ判然はつきり分りませぬ」

奉「左様さようか……こりや萬助、其の方幸兵衛と柳が夫婦になつたのは何時いつか存じて居おるか」

萬「へい、たしか五ヶ年前と承うわりましたが、私わたくしは其ののち後に奉ほ公住こうずみをいたしましたので」

奉「夫婦の者は当年何歳に相成るか存じて居おるか」

萬「へい幸兵衛は五十三歳で、柳は四十七歳でございませう」

奉「左様か」

と奉行は眼まなこを閉じて暫時ざんじ思案の様子でありましたが、白洲を見渡して、

奉「長二郎、只今の申立てに聊かも偽りはあるまいな」

長「けちりんも嘘は申しません」

奉「追つて吟味に及ぶ、長二郎入牢申付ける、萬助恒太郎儀は追つて呼よびいだ出す、一同立ちませい」

是にて此の日のお調べは相済みましたが、筒井侯は前ぜんにも申述べました通り、坂倉屋の主人又は林大學頭様から、長二の伎倆うでまえの非凡なる事を聞いておられますから、斯様な名人を殺すは惜おしいもの、何とかして助命させたいとの御心配で、狂人の扱いにしようと思召したのを、長二は却かえつて怒り、事実を明白に申立てたので、折角の心尽しも無駄になりましたが、その気性の潔白なるに益ますく々感服致されましたから、猶工夫をして助命させたいと思召

し、一先ひとまず調べを止やめてお邸やしきへ帰られました。当今は人殺ひところしにも過失殺故殺謀殺などとか申して、罪に軽けい重じゆうがございませうから、少しの云廻しで人を殺しても死罪にならずにしまいますが、旧幕時代の法では、復かたきうち讐ぢゆうの外は人を殺せば大抵死罪と決つて居りますから、何分長二を助命いたす工夫がございませぬので、筒井侯も思案に屈し、お居間に閉とじこも籠こもつて居られますを、奥方が御心配なされて、

奥「日にち々じゆうの御繁務ごはんむさぞお氣疲れ遊ばしましょう、御鬱散ごうつさんのため御酒でも召上り、先頃召抱えました島路しまじと申す腰元は踊が上手とのことでございますから、お慰みに御所望遊ごしよもうばしては如何いかゞでございます」

和泉「ム、その島路と申すは出入町人助七の娘じやな」

奥「左様にございます」

和「そんなら踊の所望は兎も角も、これへ呼んで酌を執らせいと

と御意がございましたから、時を移さずお酒宴の支度が整いま

して、殿様附と奥方附のお小姓お腰元奥女中が七八人ずらりツ

と列びまして、雪洞の灯が眩しいほどつきました。此の所へ文

金の高髻に紫の矢筈緋の振袖で出てまいりましたのは、浅

草蔵前の坂倉屋助七の娘お島で、当お邸へ奉公に上り、名を島路

と改め、お腰元になりましたが、奥方附でございませうから、殿様

にはまだお言葉を戴いた事ありません、今日のお召は何事かと

心配しながら奥方の後へ坐つて、丁寧に一礼をいたしますを、殿

様が御覽遊ばして、

和「それが島路か、これへ出て酌をせい」

との御意でありますから、島路は恐るゝ横の方へ進みましてお酌を致しますと、殿様は島路の顔を見詰めて、盃の方がおるすになりましたから、手が傾いて酒が翻こぼれますのを、島路が振袖の袂で受けて、盃へ一滴もこぼしません、殿様はこれに心付かれて、残りの酒を一口に飲みほして、盃を奥方へさゝれましたから、島路は一礼をして元の席へ引ひきさが退ろうと致しますのを、

和「島路待て」

と呼留められましたので、並居る女中達は心の中うちで、さては御前様は島路に思召があるなど互に袖を引合つて、羨ましく思つて

居ります、島路はお酒のこぼれたのを自分の粗相とでも思召して、お咎めなさるのではあるまいかと両手を突いたまゝ、其処そこに居ずくまっておりますと、殿様は此方こっちへ膝を向けられました。

三十

和「ちよつと考え事を致して粗相をした、免せゆる……其方そちに尋ねる事があるが、其方も存じて居おるであろう、其方の家へ出入をする木具職の長二郎と申す者は、当時江戸一番の名人であると申す事を、其方の父から聞及んで居るが、何ういう人物じゃ、職人じやによつて別に取柄とりえはあるまいが、何ういう性質の者じゃ、知ら

んか」

との御意に、島路は予て長二がかね伎倆うでまえの優れて居るに驚いて居るばかりでなく、慈善を好む心こころだて立の優しいのに似ず、金銭や威光に少しも屈せぬ見識の高いのに感服して居ります事ゆえ、お尋ねになつたを幸い、お邸やしきのお出入にして、長二を引立て、やろうとの考えで、

島「お尋ねになりました木具職の長二郎と申します者は、親共が申上げました通り、江戸一番の名人と申す事で、其の者の造りました品は百年経つても狂いが出ませず、又何程粗暴てあらに取扱ひましても毀れる事がないと申すことでございます、左様な名人で多分な手間料を取りますが、衣類などは極ごく々々、質素で、悪遊びを

いたさず、正直な貧乏人を憐れんで救助するのを^{たの}楽しみにいたしま
すに就^つては、女房があつては思うまゝに金銭を人に施すことが出
来まいと申して、独身で居ります程の者で、職人には珍らしい心
掛で、其の気性の潔白なものには親共も感心いたして居ります」
和「フム、それでは普通の職人が動^やともすると喧嘩口論をいた
して、互に疵をつけたりするような粗暴な人物じゃないの」

島「左様でございます、あゝ、いう心掛では無益な喧嘩口論など
は決して致しますまいと存じます、殊に御酒は一滴も戴きません
と申す事でございますゆえ、^{あやま}過ちなどは無いことゝ存じますが、
只今申上げました通り潔白な気性でございますゆえ、^{ひと}他から恥辱
でも受けました節は、その恥辱を雪^すぐまでは、一命を捨てゝも飽

くまで意地を張るといふ性根の確かりいたした者かとも存じます」
和「ム、左様じゃ、其方の目は高い……長二郎は左様いう男だ
ろうが、同人の親達は何ういう者か其方は知らんか」

島「一向に存じません」

和「そんなら誰か長二郎の素性や其の親達の身の上を存じて居
る者はないか、其方は知らんか」

と根強く長二郎のことを穿鑿される仔細が分りませんから、
奥方が不審に思われまして、

島「御前様、その長二郎とか申す者のことをお聞き遊ばして、
如何遊ばすのでござります」

と尋ねられたので、殿様は長二郎を助ける手段もあろうかとの

熱心から、うかく島路に根問いをした事に心付かれましたが、お役向の事を此の席で話すわけにも参りませんから、笑いに紛らして、

和「何サ、その長二郎と申す者は役者のような美しい男じやによつて、島路が懸想でもして居るなら、身が助七に申聞けて夫婦にしてやろうと思つたのじや」

と一時の戯たわむれにして此の場の話を打消そうと致されましたのを、女中達は本当の事と思つて、羨ましそうに何れも島路の方かたへ目を注ぎますので、島路は羞はづかしくもあり、又思いがけない殿様の御意に驚き、顔を赧あからめて差さしう俯つむいて居りますを、奥方は氣の毒に思召して、

「如何いかに御前様の御意でも、こりや此の所では御挨拶が成りま
すまいのう島路」

と奥方にまで問詰められて、島路は返答に困り、益々顔を赧く
してもじくいたして居りますと、女中達は羨ましそうに、

春野「島路さん、何をお考え遊ばします、願つてもない御前様
の御意わたくし、私わたくしなら直すぐにお受けをいたしますのに、お年がお若いせい
か、ぐずくして」

常夏「春野さんの仰しやる通り、此の様な有難い事はござんせ
ぬ、それとも殿御の御器量がお錠じょうぐち 口の金かねつぼ 壺さんのようなら、
私わたくしのような者でも御即答は出来ませんが、その長二郎さんという
方は役者のような男だと御前様が仰しやったではござりませぬか」

千草「そのうえお仕事が江戸一番の名人で、お金が沢山儲かる
との事」

早咲「そればかりでも結構すぎるに、お心立が優しくって、きりりと締った所があるとは、嘘のような殿御振り、お話を承わりましたばかりで私わたくしはつい、ホゝ……オホゝゝ」

と女中達のはしたなきお喋りも一座の興でございます。

三十一

殿様は御機嫌よろしく打笑うちえまれました、

和「どうじゃ島路、皆の者は話を聞いたばかりで彼様かように浮れて

居おるに、其方なは何故な鬱ふさぐのじや」

と退のつ引びきのならんお尋ねを迷惑には思いましたが、此の所で一

言ち申ごんしておかなければ、殿様が自分を他ほかの女中達のように思召

して、万一父助七へ御意のあつた時は、否いなやを申上げること出

来ぬと思ひましたから、羞かしいのを堪こえまして、少し顔を上げ、

島「だんくの御意は誠に有難う存じますが、何卒どうぞ此の儀は御

沙汰さた止やみにお願い申上げます、長二郎は伎倆うでまえと申し心立と申し、

男として不足の廉かじは一つもございせんが、私家わたくしは町人ながらも

系図正しき家筋でございますれば、身分違いの職人の家へ嫁入り

を致しましては、第一先祖へ濟みませず、且かつ世間で私の不身持か

ら余儀なく縁組を致したのであろうなぞと、風聞をいたされま

のが心苦しゅうございますれば、何卒此なにとぞの儀は此の場ぎり御沙汰止にお願い申上げます」

ときつぱり申述べました。追々世の中ひらが開けて、華族様と平民と縁組を致すようになった当今のお子様方は、この島路の口上をお聞きなすつては、開けない奴だ、町人と職人と何どれほど程ちがの違がいがある、頑固にも程があると仰しやいましょうが、其の頃は身分という事がやかましくなつて居りまして、お武家と商人あきんどとは縁組が出来ません、抛よんどころ所なく縁組をいたす時は、其の身分にわか応じて仮親こしらを拵こしらえますことで、商人と職人の間にも身分の分わかちが立たつて居りました、殊に身柄のある商人はお武家が町人百姓を卑しめる通り、職人を卑しめたものでございますから、島路は長二郎を不足

のない男とは思つて居りますが、物の道理を心得て居るだけに、此の御沙汰を断つたのでございます。殿様は元来左様そういう思おぼしめ召しではなく、只此の場の話を紛らせようと、戯れ半分に仰しやつたお言葉が本当になつたので、取返しがつかず、困つておられた処へ、島路が御沙汰止を願いましたから、これを幸いに、

和「おゝ、何も身が無理に左様そういうのではない、左様いうことなら今の話は止めやにするから、島路大儀じゃが下物さかなに何か一つ踊つて見せい」

と踊りの御所望ごしよもうがございましたから、女中達は俄に浮き立ちまして、それ／＼の支度をいたし、さア島路さん、早くと急せき立てられて、島路は迷惑ながら一旦其の席を引退ひきさがりまして、斯か

よう
 様な時の用心に宿から取寄せて置いた衣裳を着けて出ました、容
 貌は一段に引立って美しゆうございまして、殿様が早くとのお詞ことば
 に随い、島路は憶する色なく立上りまして、珠たまとり取の段を踊りま
 すを、殿様は能くも御覧にならず、何か頻しきりに御思案の様子でござ
 いました、踊の半なかごろ頃で、

和「感服いたした、最もうよい、疲れたであろう、休息いたせ」

と踊を差止め、酒さけさかな肴さかなを下げさせ、奥方を始め女中達を遠ざ

けられて、俄に腹心の吟味与力よしだこまじろう吉田駒二郎と申す者をお召にな

りまして、夜よの更けるまで御密談をなされたのは、全く長二郎の

一件に就いて、幸兵衛夫婦の素性を取調べる手懸りを御相談にな

ったので、略ほく探索の方も定まりましたと見え、駒二郎は御前しりぞを退

いて帰宅いたし、直に其の頃探偵捕^{とりもの}者の名人と呼ばれた金太^{きんたろ}郎^う繁^{しげ}藏^{ぞう}という二人の御用間を呼寄せて、御用の旨を申含めました。

三十二

町奉行筒井和泉守様は、長二郎ほどの名人を失うは惜^{おし}いから、救う道があるなら助命させたいと思召^{ぼか}す許^{ばか}りではございません、段々吟味の模様を考えますと、幸兵衛夫婦の身の上に怪しい事がありますから、これを調べたいと思召^{ぼか}したが、夫婦とも死んで居ります事ゆえ、吟味の手懸りがないので、深く心痛いたされまし

て、ようやく漸々に幸兵衛が龜甲屋お柳方へにゆうふ入夫になる時、下谷稻荷町みのやもじさくの美濃屋茂二作と其の女房よしお由がなこうど媒妁同様に周旋をしたということを聞出しましたから、早速お差さしがみ紙をつけて、右の夫婦を呼出して白洲を開かれました。

奉行「下谷稻荷町とくべいたな徳平店茂二作、並に妻由ならびさい、その他名主、代組合の者残らず出ましたか」

町役「一同差添いましてござります」

奉「茂二作夫婦の者は長年龜甲屋方へでいり出入をいたし、柳に再縁を勧め、其の方共なかだちが媒妁をいたして、幸兵衛と申す者を入夫にいたせし由じゃが、さよう左様か」

茂「へい左様でございます」

由「それも私わたくしども共どもが好んで致したのではございませよんどころん、抛なな
く頼まりましたので」

奉「如何なる縁をもつて其の方共は龜甲屋へ出入をいたしたの
か」

茂「それはあの龜甲屋の先せんの旦那半右衛門様はんえもんが、御公儀の仕立
物御用を勤めました縁で、私共も仕立職の方で出入をいたしまし
たので、へい」

奉「何歳の時から出入いたしたか」

茂「二十六歳の時から」

奉「当年何歳に相成る」

茂「五十五歳で」

奉「由は龜甲屋に奉公をいたせし趣おもむきじやが、何歳の時奉公にま
いった」

由「へい、私わたくしは十七の三月からでございますから」
と指を折つて年を数え、

「もう廿八九年前の事でございます」

奉「其の後ご兩人とも相變らず出入をいたして居つたのじやな」

茂「左様でございます」

奉「して見ると其の方共じつてい実体に勤めて、主人の氣に入つて居
つたものと見えるな」

由「はい、先せんの旦那様がまことに好よいお方で、私共へ目をかけ
て下さいましたので」

奉「左様であろう、して柳と申す女は何時頃いつごろ半右衛門方へ嫁に
まいったものか、存じて居ろうな」

茂「へい、私わたくしが奉公にまいりました年で、御新造ごしんぞは其の時慥たしか
十八だと覚えて居ります」

奉「御新造とはお柳のことか」

茂「へい」

奉「して、半右衛門は其の時何歳であつた」

茂「左様で」

と考えて、お由とさゝやき、指を折り、

茂「三十二三歳であつたと存じます」

奉「当月九日の夜よ、柳島押上堤において長二郎のために殺せつがい害

された幸兵衛という者は、如何なる身分職業で、龜甲屋方に入夫にまいるまで、いづかた何方に住居いたして居つた者じや」

茂「幸兵衛は坂本二丁目のきようじや経師屋桃山もくやまかんろく甘六の弟子で、其の家が代替りになりました時、いとま暇を取つて、それから私わたくしかた方に居りました」

奉「其の方宅に何なんがねん個年居つたか」

茂「左様でございます、彼は十年たらず居りました」

奉「だいぶんフム大分久しく居つたな」

茂「へい、随分厄介ものでございました」

奉「其の方の宅において幸兵衛は常に何をいたして居つた」

茂「へい、只ぶらく、いえ、アノ経師をいたして居りました」

奉「フム、由其の方は存じて居ろうが、龜甲屋の元の宅は根岸であつたによつて、坂本の経師職桃山が出入ゆえ、幸兵衛が屢々仕事にまいったであろう」

由「はい」

と云いにかゝるを茂二作が目くばせで止めましたから、慌て、咳払いに紛らし、

由「いゝえ、あの私わたくしは存じません」

奉「隠すな、隠すと其の方の為にならんとぞ、奉行は宜よく知つて居おるぞ、幸兵衛が障子の張替えなどに度々まいったであろう」

由「はい、まいりました」

奉「左様そうであろう、して、幸兵衛が其の方の宅に居つた時は経

師職はいたさなんだと申す事じゃが、其の方共の家業の手伝でもいたして居ったのか、何うじゃ」

由「へい、証文を書いたり催促や何かを致して居りました」

奉「ム、それでは貸附金の証文の書役などを致して居ったのじゃな、して其の貸付金は誰の金じゃ」

茂「それは、へい私の所持金で」

奉「余ほど多分に貸付けてある趣じゃが、其の方如何して所持いたし居るぞ、これは多分何者か其の方どもの実体なるを見込んで、貸付方を頼んだのであろう、いや由、何も怖がることは無い、存じて居ることを真直に申せばよいのじゃ」

三十三

由「はい、その金は、へい先の旦那がお達者の時分から、御新造様がお小遣の内を少しずつ貸付けになさったので」

奉「フム、然らば半右衛門の妻柳が、出入の経師職幸兵衛を正直な手堅い者と見込んだゆえ、其の方の宅において貸付金の世話をいたさせたのじやな、左様であろう、何うじや」

茂「左様でございます」

奉「由其の方は女の事ゆえ覚えて居るであろう、柳が初めて産をいたしたのは何年の何月で、男子であったか、女子であったか、間違えんように能く勘考して申せ」

由「はい」

と両手の指を折つて頻りに年を数えながら、茂二作と何か囁ささや
きまして、

由「申し上げます……あれは今年から二十九年前で、慥か御新造
が十九の時で、四月の二十日はつかに奥州へ行くと云つて暇いとまごい乞ごにま
いりました人に、旦那様だんなさまが塩釜しほがま様のお符ふだをお頼みなさつたので、
わたくし私は初めて御新造みもち様が懐妊みもちにおなりなさつたのを知つたのでござ
います、御誕生は正月十一日お蔵開きの日で、お坊さんでござい
ますから、目出たいと申して御祝儀ごしゅうぎを戴いたのを覚えて居りま
す」

奉「ム、柳かいにんが懐妊と分つた月を存じて居おるか」

と奉行は暫らく眼まなこを閉じて思案をいたされまして、

奉「由其の方はなか／＼物覚えが宜いな、然らば幸兵衛が龜甲屋方へ初めてまいったのは何年の何月頃じやか、それを覚えて居らんか」

由「はい、左様さよう」

と暫らく考えて居りましたが、突然いきなりに大きな声で、

由「思い出しました」

と奉行の顔を見上げて、

由「幸兵衛が初めてまいりましたのは、其の年の五月絹張きぬばりの
行灯あんどんが一对出来るので」

と茂二作の顔を見て、

由「それ、お前さんが桃山を呼びに行ったら、其の時幸兵衛さんが来たんだよ、御新造が美しい男だと云つて、それ、あの」

と喋るのを茂二作が目くばせで止めても、お由は少しも気がつかずに、

由「別段に御祝儀をお遣んなさつたのを、お前さんがソレ」

と余計なことを喋り出そうといたしますから、茂二作が氣を揉んで睨めたので、お由も氣が付いたと見えて、

由「へい、マア左様そういうことで、それから私わたくしども共まで心安くなつたので、其の初めは五月の二日でございます」

奉「して見ると柳の懐妊の分つたのは、寛政四年の四月で、幸兵衛が初めて龜甲屋へまいったのは同年五月二日じゃな、それに

相違あるまいな」

茂「へい」

由「間違いございません」

奉「そうして其の出生しゅっしょういたした小児は無事に成長致したか、

何うじゃ」

由「くりくふと肥った好いお坊さんでございましたが、御新造の

お乳が出ませんので、八王子のお家うちへ頼んで里におやんなさいま
したが、間も無くなくな歿なつたそうでございます」

奉「その小児を八王子へ遣る時、誰たれがまいった、親半右衛門で
も連れてまいったか」

由「いゝえ、旦那様はお産があると間もなく、慥か二十日正月

の日でございました、急な御用で京都へお出でになりましたから、御新造が御自分でお連れなされたのでござります」

奉「柳いちにん一人ではあるまい、誰たれか供をいたして参つたであろう」

由「はい、供には良人やどが」

奉「やどとは誰だれの事じゃ」

茂「へい私わたくしが附いてまいりました」

奉「帰りにも其の方同道うちいたしたか」

茂「旦那が留守で宅うちが案じられるから、先へ帰れと仰しやいましたから、私わたくしはお新造より先へ帰りました」

奉「柳の実家さとと申すは何者じゃ、存じて居おるか」

茂「へい八王子の千人同心だと申す事でございますが、家うちが死し

絶にたえて、今では縁の伯母が一人あるばかりだと申すことでござい
 ますが、私わたくしは大横町おおよこちょうまで送つて歸りましたから、先の家うちは存
 じません」

奉「其の方の外に一緒にまいった者は無いか」

茂「はい、誰たれも一緒にまいった者はございませぬ」

奉「黙れ、其の方は上かみに対し偽りを申すな、幸兵衛も同道いた
 したのであろう」

茂「へい、誠にどうも、宅うちからは誰だれも外にまいった者はござ
 りませんが、へい、アノ五宿ごしゆくへ泊りました時、幸兵衛が先へま
 いって居りまして、それから一緒にへい、つい古い事で忘れまし
 て、まことにどうも恐入りました事で」

奉「フム、左様さようであろう、して、柳は幾日いくかに出て幾日に帰宅を
いたしましたか存じて居ろう」

茂「へい左様……正月二十八日に出まして、あのう二月の二十
日頃に帰りましたと存じます」

奉「それに相違ないか」

茂「相違ちがございません」

奉「確しかと左様か」

茂「決して偽りは申上げません」

奉「然らば追つて呼出すまで、茂二作夫婦とも旅行は相成らん
ぞ、町役人共左様に心得ませい……立ちませい」

是にて此の日のお調べは済みました。

三十四

奉行は吟味中お由の口上で、図らずお柳の懐妊の年月ねんげつが分つたので、幸兵衛が龜甲屋へ出入を初めた年月としつきを糺すと、懐妊した翌月よくつきでありますから、長二は幸兵衛の胤たねでない事は明白でございしますが、お柳は実母に相違ありませんから、まだ親殺しの罪を遁のがれさせることは出来ません。是には奉行も殆んど当惑して、最早長二を救うことは出来ぬとまで諦められました。

由「私わたしア本当に命が三年ばかり縮まったよ」

茂「男でさえ不気味だもの、其の筈だ」

由「大屋さんは平気だねえ」

茂「そうサ、自分が調べられるのじやアないからの事た、此方
 とらはまかり間違えば捕縛ふんじばられるのだから怖おっかねえ」

由「今日の塩梅じやア心配しなくつても宜いいようだねえ」

茂「手前てめえが余計なことを喋りそうにするから、己おらア冷々ひやくした
 ぜ」

由「行く前に大屋さんから教わつて置いたから、檻ぼろ樓を出さず
 に済んだのだ、斯ういう時は兀頭はげも頼りになるねえ」

茂「それだから鰻で一杯飲ましてやったのだ」

由「鰻なぞを喰ったことが無いと見えて、串までしやぶつて居
 たよ」

茂「まさか」

由「本当だよ、お酒も彼あんなな好いいのを飲んだ事あないと見えて、大層酔ったようだった」

茂「己おれも先刻さつきは甚ひどく酔ったが、風が寒いので悉すっかり皆醒さめてしまつた」

由「早く帰つて、又一杯おやりよ」

と茂二作夫婦は世話になつた礼れいごころ心こころで、奉行所から帰宅の途中、ある鰻屋へ立寄り、大屋徳平とくへいに夕飯ゆうめしをふるまい、徳平に別れて下谷稻荷町の宅へ戻りましたのは夕七時ななつはん半過はんで、空はどんより曇つて北風が寒く、今にも降出しそうな気色けしきでございますので、此の間から此の家の軒下を借りて、夜店を出します古道具

屋と古本屋が、大きな葛籠つづらを其処へ卸して、二つ三つ穴の明いたふるうすべり古薄縁ひろを前へ拵ひろげましたが、代物しろものを列ならべるのを見合せ、葛籠に腰をかけて煙草を呑みながら空を眺めて居ります。

茂「やア道具屋さんも本屋さんも御精が出ます、何だか急に寒くなつて来たではありませんか」

道「お帰りですか、商売冥利みょうりですから出ては見ましたが、今にも降つて来そうですね、考えているんです」

茂「こういう晩には人通りも少ないからねえ」

本「左様そうですが天道干てんとうぼしという奴ア商いの有無あるなしに拘あわらず、毎晩めいばん同おんじ所なえ出とけて定店じょうみせのようにしなけりやアいけやせんか

ら、寒いのを辛抱して出て来たんですが、雪になつちやア当分喰

込みです」

茂「雪は後あとが長くわるいからね」

と立話をしておりますうち、お由が隣へ預けて置いた入口しまりの締の鍵を持って来て、格子戸を明けましたから、茂二作は内へ入り、お由は其の足すくで直に酒屋へ行つて酒を買い、貧乏徳利びんぼうどくりを袖に隠して戻りますと、茂二作は火種たどんに付けて置いた炭団かきおこを搔発かきおこして、其の上に消炭を積上げ、鼻あぶを炙りながらブー／＼と火を吹いて居ります。お由は半纏はんでんばおり羽織はを脱いで袖畳みにして居りますと、表の格子戸をガラリツと明けて入はいてまいりました男は、太織ふとおりというと体裁よが宜うございますが、年数を喰つて細織はになつた、上の所斑まんだらに褪はげておる焦茶色の短かい羽織はに、八丈まがいの脂あ

染ぶらじみた小袖を着し、一いっぽんどっこ本独いっぽんどっこ鉗この小倉の帯に、お釈迦の手のよ
 うな木刀をきめ込み、葱ねぎの枯かれ葉つばのようなぱつちに、白足袋でな
 い鼠足袋よりげたというのを穿はき、上あげ汐しおの河流れを救つて来たような日ひ
 和下駄よりげたで小包さを提さげ、黒の山岡頭巾を被つて居ります。

三十五

誰だか分りませんが、風ふう体ていが悪いから、お由が目くばせをし
 て茂二作を奥の方へ逐おい遣やり、中仕切なかじきりの障子を建切りまして、

由どなた「何方どなたです」

「はい玄げん石せきでござるて」

と頭巾を取つて此方を覗込みました。

由「おやく、岩村さんで、お久しぶりでございますこと」

玄「誠に意外な御無音をいたしたので、併し毎も御壮健で」

と拇指を出して、

玄「御在宿かな」

というは正しく合力を頼みに来たものと察しましたから、

由「はい、今日は生憎留守で、マアお上んなさいな」

と口には申しましたが、玄石が腰を掛けて居る上り端へ、べつ

たりと大きなお尻を据えて居りますから、玄石が上りたくも上る

ことが出来ません。

玄「へい何方へお出でず、もう程のう御帰宅でしょう」

由「いゝえ此の頃親類が災難に遭つて、心配中で、もう少し先刻つき其の方へ出かけましたので、私も是れから出かけようと、此の通り今着物を着替えたところで、まことに生憎な事でした、お宿が分つて居りますれば明日にも伺わせましょう」

玄「はい、宿と申して別に……実に御承知の通り先年郷里へ隠遁をいたした処、兵糧ひようろう方の親族に死なれ、それから已やむを得ず再び玄関を開くと、祝融しゆくゆうの神に憎まれて全焼まるやけと相成つたじや、それからというものは為する事なす事鶉いすかの嘴はし、所詮田舎では行ゆかんと見切つて出府しゆつぷいたしたのじやが、別に目的もないによつて、先ず身の上を御依頼申すところは、龜甲屋様と存じて根岸をお尋ね申した処、鳥越へ御転居に相成つたと承わり、早速伺つ

たら、いやはや意外な凶変、実に驚き入った事件で、定めて此方こなたにも御心配のことゝ存ずるて」

由「まことにお気の毒な事で、何とも申そう様ようがございません、定めてお聞でしょうが、お宅うちへお出入の指物屋が金に目が眩くれて殺したんですとサ」

玄「ふゝむ、不埒千万な奴で……実に金が敵かたきの世の中です、然るに愚老は其の敵めぐに廻り逢おうと存じて出府致した処、右の次第で当惑のあまり此方こなたへ御融通を願ひに出たのですから、何卒どうか何分まことがわるいので、どうも」

玄「でもあろうが、お手許てもとに遊んで居らんければ他たからでも御

才覚を願いたい、利分は天引でも苦しゅうないによつて」

由「ハア、それは貴方のことですから、才覚が出来さいすれば何の様にも骨を折つて見ましようが、何分今が今と云つては心当りが」

玄「其^{そこ}処を是非とも願うので」

と根強く掛^{かけ}合^{あい}込みまして、お由にはなか／＼断りきれぬ様子でありますから、茂二作は一旦脱^ぬいだ羽織^{ひっかけ}を引掛^{ひっか}け、裏口^{そつ}から窺^ぬけだして表へ廻り、今帰つたふりで門口を明けましたから、お由はぬからぬ顔で、

由「おや大層早かつたねえ」

茂「いや、これは岩村先生……まことにお久しい」

玄「イーヤお帰りですか、意外な御無音、実に謝するに言葉がござらんで」

茂「何うなさったかと毎度お噂をして居りましたが、まあお變りもなく結構です」

玄「ところがお變りだらけで不結構という次第を、只今御内方へ陳述いたして居るところで、実に汗顔の至りだが、国で困難をして出府いたした処、頼む樹陰に雨が漏るで、龜甲屋様の變事、進退谷まったので已むを得ず推参いたした訳で、老人を愍然と思召して御救助を何うか」

茂「成程、それはお困りでしょうが、当節は以前と違って甚い不手廻りですから、何分心底に任しません」

と金子を紙に包んで、

茂「これは真ほんの心ばかりですが、草鞋錢と思つて何うぞ」

と差出すを、

玄「はいくゝ実に何とも恐縮の至りで」

と手に受けて包をそつと披ひらき、中を見て其の儘に突戻しまして、

玄「フン、これは唯たつた二百足びきですねえ、もし宜く考えて見てお

くんなさい」

茂「二分では少いと仰しやるのか」

玄「左様さようさ、これツばかりの金が何になりましたよ」

茂「だから草鞋錢だと云つたのだ、二分の草鞋がありやア、京

都へ二三度行つて帰ることが出来る」

玄「ところが愚老の穿く草鞋は高直だによつて、二百足では何うも国へも歸られんて」

茂「そんなら幾許いくらほし欲しいというのだ」

玄「大負けに負けて僅わずか百両借りたいんで」

三十六

由「おやまア呆れた」

茂「岩村さん、お前とんでもねえ事をいうぜ、何で百両貸せというのだ、私わしアお前さんにそんな金を貸す因縁はない」

玄「成程因縁はあるまいが、龜甲屋の御夫婦なくなが歿あかつきつた暁は、昔

馴染こなたの此方すへ縋すがるより外に仕方がないによつて」

茂「昔馴染だと思ふから二分はずんだのだ、左様そうでなけりやア百もくれるのじやアない、少いというなら止しまししようよ」

玄「宜しい、此方こつちでも止ましよう、憚りながら零落しても岩村玄石だ、先年売込んだ名前があるから秘術しんじ鍼治しんじの看板かを掲かけさいすれば、五両や十両の金は瞬また間くまに入はいって来るのは知れてゐるが、見苦しい家うちを借りたくないから、資本を借りに来たのだが、貴公きこうが然そういう了簡りょうかんなら、貸そうと申されてももう借用けいようはいたさぬて」

茂「そりやア幸いだ、二分棒ふぶんぼうにふるところだった、馬鹿ばかくし
い」

玄「何だ馬鹿くしいとは、何だ、貴公達は旧もとの事を忘れたのか、物覚えの悪い人たちだ、心得のため云つて聞かせよう、貴公達は龜甲屋に奉公中、御新造様に情夫おとこを媒介とりもつて、口止に貰つた鼻薬をちびく貯めて小金貸こがねかし、それから段々慾が増長し、御新造様のくすねた金を引出して、五兩一の下した金貸かねかし、貧乏人の喉を搾しめて高利を貪り仕上げた身代、貯るほど穢きたなくなる灰吹同前の貴公達の金だ、仮令たとえ借りても返さずには置かないのに、何だ金比羅詣り同様な錢貰いの取扱い、草鞋錢とは失礼千万、たとい金は貸さないまでも、遠国から出て来て、久しぶりで尋ねて来たのだ、此こ様んな家うちへ泊りはしないが、お疲れだろうから一泊なさいとか、また鹿角菜ひじきに油揚の惣菜では喰いもしないが、時刻だから御飯を

とか世辞にも云うべき義理のある愚老を、輕蔑するにも程がある
て」

由「おや大層お威張りだねえ、何ですとアノ」

茂「お由黙っている、強請ゆすりだから」

玄「なに強請だ、愚老が強請なら貴公達は人殺ひところしの提灯持だ」

茂「やア、とんだ事をいう奴だ、何が人殺だ」

玄「聞きたくば云つて聞かせるが、貴公達は龜甲屋の旦那の病
中に、愚老へ頼んだことを忘れたのか」

と云われて、夫婦は恟びつくりして顔色を変え、顫ふるえながら小さな声
をして、

茂「これサ、それを云やア先生も同罪だぜ、まア静かにおしな

さい、人に聞かれると善くないから」

玄「それは万々承知さ、此様なことは云いたくは無いが、余りあんま貴公達が因業で吝嗇けちだからさ」

由「それじゃお前さん虫がいゝというもんだ、先生お前さん彼あの時御新造から百両貰ったじゃアありませんか」

玄「百両ばかり何うなるものか、なくなつたによつて、又百両又百両と、千両ばかり段々に貰う心得で出て来て見ると、天道様は怖いもので、二人とも人手にかゝつて殺されたというから、向きようこう

後 悪事はいたさぬと改心をしたが、肝腎の金庫かねぐらが無くなつて見ると、玄石殆んど路頭に迷う始末だから、已むを得ず幸いに天網てんもうを遁のがれて居おる貴公達へ、御頼談ごらいだんに及んだのさ」

茂「それでも私わしにア一本という大金は」

玄「出来ないというのを無理にとは申さんが、其の金が無い時は玄関を開く事も出来ず、再び郷里へ帰る面目もないによつて、路傍に餓死するより寧ろむし自から訴え出て、御法を受けた方が未来のためになろうと観念をしたのさ、其の時は御迷惑であろうが、貴公達から依頼を受けて斯々こつこついたしたと手続きを申し立てるによつて、その覚悟で居つてもらわなければならんが、宜しいかね」

と調子に乗つて声こゝろ高に談判するを、先刻せんこくより軒前のきさきに空合そらあいを眺めて居りました二人の夜店商人あきんどが、互いに顔を見合わせ、領うなずきあい、懐中から捕縄とりなわを取出すや否や、格子戸をがらりつと明けて、

「御用だ……神妙にいたせ」

と手早く玄石に縄をかけ、茂二作夫婦諸共に車坂の自身番へ拘引いたしました。この二人の夜店商人は申すまでもなく、大抵御推察になりましたろうが、これは曩さきに吟味与力吉田駒二郎から長二郎一件の探偵方を申付けられました、金太郎繁藏の両人でございます。

三十七

岩村玄石を縛りあげて嚴重に取調べますと、此の者は越えつちゆう中うの国くに射水郡高岡の町医の倅で、身持放埒ほうらつのため、親の勘当を

受け、二十歳はたちの時江戸に来て、ある鍼医はりいの家の玄関番に住込み、
 少しばかり鍼術はりを覚えたので、下谷かなすぎむら金杉村むらに看板をかけ、幫間たいこ
 半分に諸家へ出入をいたして居おるうち、根岸の龜甲屋へも立入る
 ことになり、諂おべっか諛かが旨いのでお柳の氣に入り、茂二作夫婦とも
 懇意になりました所から、主人半右衛門が病氣の節お柳幸兵衛の
 内意を受けた茂二作夫婦から、他ひとに知れないように半右衛門を毒
 殺してくれたら、百両礼をすると頼まれたが、番木鱉まちんの外は毒薬
 を知りません。また鍼はりには戻も天てんといつて一ひと打うちで人を殺す術が
 あるということは聞いて居りますが、それまでの修業をいたしま
 せんから、殺す方角がつきませんが、眼の前に吊ぶらさが下がっている百
 両の金を取とり損そこなうのも残念と、種々いろくに考えるうち、人体の左の

乳の下は心谷しんこくめいもん命門といつて大切な所ゆえ、秘伝を受けぬうち
 は無闇に鍼を打つことはならぬと師匠が毎度云つて聞かしたこと
 を思い出しましたから、是が戻天の所かも知れん、物は試しだ一
 番行て見ようといふので、茂二作夫婦には毒薬をもつて殺す時は
 死相が變つて、人の疑いを招くから、愚老が研究した鍼の秘術で
 殺して見せると申して、例の通り療治をする時、半右衛門の左の
 乳の下へ思切つて深く鍼を打つたのがまぐれ中りあたりで、命門に達し
 たものと見えて、半右衛門は苦痛もせず落命いたしましたから、
 お柳と幸兵衛は大に喜び、玄石の技術うでまえを褒めて約束の通り金百
 両を与えて、堅く口止をいたし、茂二作夫婦にも幾許いくらかの口止金
 を与えて半右衛門を病死と披露して、谷中の菩提所へ埋葬とりおきをい

たしたと逐一旧悪を白状に及びましたので、幸兵衛お柳の大悪人
 ということが明白になり、長二郎は囚らず実父半右衛門の仇幸兵
 衛を殺し、敵討をいたした筋に当りますが、悪人ながらお柳は実
 母でございますから、親殺しの廉かどは何うしても遁のがれることは出来
 ませんので、町奉行筒井和泉守様は抛よんどころなく、それ／＼の口こうし
 書を以て時の御老中の筆頭よ土井大炊頭どいおおいのかみ様へ伺いになりました
 から、御老中あおやましもつけのかみ青山下野守様、阿部備中守あべびつちゆうのかみ様、水野出
 羽守かみ様、大久保加賀守おおくぼかぎのかみ様と御評議の上、時の將軍家いえなり齊公へ長
 二郎の罪科御裁許を申上げられました。この家齊公と申すは徳川
 十一代の將軍にて、文恭院ぶんきやういん様と申す明君めいくんにて、此の時御年
 四十六歳にならせられ専ら天下の御政事の公明なるようにと御みこ

心ろを用いらるゝ折柄おりからでございませうから、容易には御裁許遊ば
 されず、猶お御老中方に長二郎を初め其た他かり関あ係いの者の身分
 行状、並に此の事件の手続等を悉くわしくお訊たゞしになりましたから、
 御老中方から明細に言ごんじよう上ごんじよういたされました処、成程半右衛門妻
 柳なる者は、長二郎の実母ゆえ親殺しの罪科あて宛おこな行うべきも
 のなるが、柳は奸夫幸兵衛と謀はかり、玄石を頼んで半右衛門を殺し
 た所より見れば、長二郎のためには幸兵衛同様親の仇に相違なし、
 然るに実母だからといって復讐の取扱が出来ぬというは如何いかにも
 不条理のように思われ、裁断くるしに困くるむとの御意にて、直すぐに御儒者ごじゆしゃ
 林大學頭様をお召しになり、御直ごしきに右の次第をお申聞けの上、斯
 様なる犯罪はまだ我国には例もなき事ゆえ、裁断いたし兼るが、

唐からくに土に類例もあらば聞きたし、且かつ別にこれを裁断すべき聖人の教おしえあらば心得のため承知したいとの仰せがありました。

三十八

林大學頭様は、先年坂倉屋助七の頼みによつて長二郎が製造いたした無類の仏壇に折おりかみ紙を付けられた時、其の文章中に長二郎が伎うでまえ倆の非凡なることゝ、同人が親つかに事つかえて孝行なることゝ、慈善を好む仁者なることを誌しるした次に、未いまだ学ばずといふと雖いえども吾は之を学びたりと謂いわんとまで長二郎を賞ほめ、彼は未だ学問をした事は無いというが、其の身持と心こゝろだて立は、十分に学問をし

た者も同様だという意味を書かれて、其の後人ごにも其の事を吹聴された事でありますから、その親孝行の長二郎が親殺しをしたと
 いつては、先年の折紙が嘘そらほめ誉めになつて、御自分までが面めん目ぼくを失われる事になりますばかりでなく、將軍家の御質問も御道理で
 ございますから、頻しきりに勘考を致されましたが、唐からにも此の様な
 科とが人にんを取扱とつた例ためしはございませんが、これに引当て、長二郎を
 無罪にいたす道理を見出されましたので、大學頭様は窃ひそかに喜ん
 で、長二郎の罪科御裁断の儀に付き篤とくと勘考いたせし処、唐土もろこしに
 おいても其の類例は見当り申さざるも、道理において長二郎へは
 御褒美の御沙汰ごさたあつて然るびよう存じ奉つると言上いたされまし
 たから、家齊公には意外に思召され、其の理を御質問遊ばされま

すと、大學頭様は五經の内の礼記と申す書物をお取寄せになりまして、第三卷目の檀弓だんぐうと申す篇の一節ひとくだりを御覧に入れて、御講釈を申上げられました。こゝの所は徳川將軍家のお儒者林大學頭様のこわいろ仮声を使わなければならぬ所でございますが、四書ししよの素読そじくもいたした事のない無学文盲わたくしの私には、所詮お解りになるようには申上げられませんあるかたが、或方あるかたから御教示を受けましたから、長二郎の一件に入用いりようの所だけを摘つまんで平たく申しますと、唐の聖人孔子様のお孫きゆゑに、※字は子思ししと申す方がございまして、そのお子をはあざな白字しじょうは子し上じやうと申しました、子上を産んだ子思の奥様が離縁きふくになつて後死のちんだ時、子上のためには実母でありますおしえが、忌服きふくを受けさせませんから、子思の門人が聖人の教おしえに背むかくと思つて、何な

にゆえ

故に忌服をお受けさせなさらないのでございまずと尋ねましたら、子思先生の申されるのに、拙者の妻さいであれば白のためには母であるによつて、無論忌服を受けねばならぬが、彼は既に離縁いたした女で、拙者の妻でないから、白のためにも母でない、それ故に忌服を受けさせないのであると答えられました、礼記の記事は悪人ひとごろしの殺人ころしだのといふ事ではありませんが、道理は宜く合つております、ちょうど是この半右衛門が子思の所で、子上が長二郎に当ります、お柳は離縁にはなりません、女の道に背き、幸兵衛と姦通かどいたしたのみならず、奸夫はかと謀つて夫半右衛門を殺した大悪人でありますから、姦通の廉かどばかりでも妻たるの道を失つた者で、半右衛門がこれを知つたなら、妻とは致して置かんに相

違ありません、然れば既に半右衛門の妻では無く、離縁したも同
 じ事で、離縁した婦はおんな仮令無瑕たとえむきずでも、長二郎のために母で無し、
 まして大悪無道、夫を殺して奸夫を引入れ、財産をおうりよう押領いた
 したのみならず、実子をも亡うしなわんといたした無慈悲の女、天道争いか
 でこれを罰せずに置きましよう長二郎の孝心厚きに感じ、天が導
 いて実父の仇を打たしたものに違いないという理解に、家齊公も
 感服いたされまして、其の旨を御老中へ御沙汰に相成り、御老中
 から直たちに町奉行へ伝達たされましたから、筒井和泉守様は雀躍こおどり
 するまでに喜ばれ、十一月二十九日に長二郎を始めめしゆうど囚人ひと玄石
 茂二作、並に妻つま由其たの他関係たの者一同をお呼出しになつて白洲を
 立てられました。

三十九

此の日は筒井和泉守様は、無けんなしうめばち劔けん梅鉢うめばちの定じょうもん紋もん付ついたる御お召めし御納戸おなんどの小袖こそでに、黒くろの肩かたぎぬ衣ぬいを着きけ茶宇ちやうの袴はかまにて小しょうとう刀とうを帶おし、シーという制止しづみの声こゑと共に御出座ごしやくざになりました、

奉行「訴人長二郎、浅草鳥越片町龜甲屋手代萬助、本所元町與兵衛店恒太郎、下谷稻荷町徳平店茂二作並に妻由、越中国高岡無宿玄石、其の外町役人組合の者残らず出ましたか」

町役「一同差添さそいましてござります」

奉「茂二作並に妻由、其の方ども先日半右衛門妻柳が懐妊懐妊いた

したを承知せしは、当年より二十九ヶ年前、即ち寛政四子年ねどしで、男子の出しゅっしょう生は其の翌年の正月十一日と申したが、それに相違ないか」

茂「へい、相違ございません」

奉「その小児の名は何と申した」

由「半之助はんのすけ様と申しました」

奉「フム、その半之助と申すは是なる長二郎なるが、何うじゃ、半右衛門に似て居ろうな」

と云われ茂二作夫婦は驚いて、長二の顔を覗のぞきまして、

茂「成程能く似て居ります、のうお由」

由「然そうですよ、ちつとも気が付かなかつたが、左様そう聞いて見

るとねえ、旦那様にそっくりだ、へい此の方が半之助様で、何うして無事で実に不思議で」

奉「ム、能う似て居おると見えるな」

と奉行は打笑うちえまれました、

奉「半右衛門妻柳が懷妊中、其の方共が幸兵衛を取持つて不義を致させたのであろう」

茂「何ういたしまして、左様な事は」

由「私わたくしどもの知らないうちに何時か」

奉「何れいずにしても宜しいが、其の方共は幸兵衛と柳が密通いたして居おるを知つて居つたであらう」

茂「へい、それは」

由「何か怪しいと存じました」

奉「柳が不義を存じながら、主人半右衛門へ内ない々くにいたし居つたは、其の方共も同家に奉公中密通いたし居つたのであろうがな」

と星を指されて兩人は赤面をいたし、何とも申しませんから、奉行は推察の通りであると心に肯うなずき、

奉「左さ様ようじやによつて幸兵衛を好よきように主人へ執とり成なし、柳にこびへつらら 諂たんい、体いよく暇いとまを取つて、入谷へ世帯を持ち、幸兵衛を同居おいたさせ置き、柳と密会を致させたのであろう、上かみには調べが届おいて居るぞ、それに相違あるまい、何うじや恐れ入つたか」

夫婦「恐入りました」

奉「それのみならず、兩人は半右衛門の病中柳の内意を受け、是れなる玄石に半右衛門を殺害する事を頼んだであろう、玄石が残らず白状に及んだぞ、それに相違あるまいな、何うじゃ、恐入ったか」

夫婦「恐入りました」

奉「長二郎、其の方は龜甲屋半右衛門の実子なること明白に分りし上は、其の方が先月九日の夜、柳島押上堤において幸兵衛、柳の兩人を殺害いたしたのは、十ヶ年前右兩人のため、非業に相果てたる実父半右衛門の敵を討つたのであるぞ、孝心の段上にも奇特に思召し、青差拾貫文御褒美下し置かるゝ有難く心得ませい、且半右衛門の跡目相続の上、手代萬助は其の方において永

の暇いとま申付けて宜かろう」

萬「へい、恐れながら申上げます、何ういう鼻はな肩かたか存じませんが余あんまり依え估この御沙汰ごさたかと存じます、成程幸兵衛は親かたきの敵かたきでもござりましよすが、御新造は長二郎の母に相違ちがひござりませんから、親殺しのお処刑しおきに相成るものと心得ますに、御褒美を下さりますとは、一円合点のまいりませぬ御裁判かと存じます」

奉「フム、よう不審に心付いたが、依估の沙汰とは不埒な申分じゃ、其の方斯様な裁判が奉行一存はからの計はからいに相成ると存じ居おるか、一いちにん人の者お処刑に相成る時は、老中方の御評議に相成り上様へ伺い上様の思召をもつて御裁許の上、老中方の御印文ごいんもんが据すわらぬうちはお処刑には相成らぬぞ、其の方公儀の御用を相勤め居った

龜甲屋の手代をいたしながら、其の儀相心得居らぬか、不束者ふつゝかものめが」

四十

奉行は高声こうせいに叱りつけて、更に言葉を和やわげられ、

奉「半右衛門妻柳は、長二郎の実母ゆえ、親殺しと申す者もあるうが、親殺しに相成らぬは、斯ういう次第じゃ、柳は夫半右衛門ぞんじょうち存生中密夫あつふを引入れ、姦通致せし廉かどばかりでも既に半右衛門の妻たる道を失つて居る半右衛門に於おいて此の事を知つたならば軽うても離縁いたすであらう、殊に奸夫幸兵衛と申合わせ窃ひそかに半右

衛門を殺した大悪非道な女じやによつて、最早半右衛門の妻でない、半右衛門の妻でなければ長二郎のために母でない、この道理を礼記と申す書物によつて林大學頭より上様へ言上いたしたによつて、長二郎は全く実父の敵である、他人の柳と幸兵衛を討取つたのであると御裁許に相成つたのじや、萬助分つたか」

萬「恐入りました」

奉「茂二作並に妻由、其の方共半右衛門方へ奉公中、主人妻柳に幸兵衛を取持つたるのみならず、柳の悪事に同意し、玄石を頼み、主人半右衛門を殺せつがい害がいいたさせたる段、主しゅう殺ころし同罪はりつけ、磔はりつけにも行なうべき処、主人柳の頼み是非なく同意いたしたる儀つきに付、格別ごじひの御慈悲をもつて十四ヶ年遠島を申付くる、有難く心得ませい」

二人「有難うござります」

奉「下谷稲荷町茂二作家主徳平、並に浅草鳥越片町龜甲屋差配みのしち箕七、其の方斯様なる悪人どもが自分の差配中に住居いたすを存ぜざる段、不取締とがに付咎め申付くべき処、此の度は免たびゆるし置く、以後屹度心得ませい」

奉「恒太郎其の方父清兵衛儀、永ながく々々長二郎を世話いたし、此の度の一件に付長二郎平へいせい生の所業心懸等とう逐一申立てたるに付、かみ上の御都合にも相成り、且かつ師弟の情じょうあい合厚き段神妙の至り誉め置くぞ」

恒「へい、有難う存じます」

奉「玄石其の方儀、半右衛門妻柳より金百両を貰い受け、半右

衛門を^{しんじゆつ}鍼術にて殺害に及びし段、不届に付死罪申付くべきの処、格別の御慈悲をもつて十四年遠島を申付くる、有難う心得ませい」

玄「有難うござります」

奉「長二郎親の^{あだうち}仇討一件^{こんにち}今日にて落着、一同立ちませい」

これで此の事件は落着になり、玄石と茂二作夫婦は八丈島へ遠島になつて、玄石は三年目に死去し、茂二作夫婦も四五年の内に死去いたしましたのは天罰、^か斯くあるべき筈でござります。さて長二郎は死罪を覚悟で駈込訴えをいたしました処、もとより^{けすじほど}毛筋程も悪心のないのは天道様が御照覧になつて居りますから、筒井様のお調べ、清兵衛のお慈悲願いから、林大學頭様の御理解等にて到頭実父の^{かたきうち}復讐となり、御褒美を戴いた上、計らず^{おおしんだい}大身代

の龜甲屋を相続いたす事になりました、公儀から指物御用達ごようたしを仰付けられましたので、長二郎は名前を幼名の半之助と改め、非業に死んだ実父半右衛門と、悪人なれど腹を借りた縁故により、お柳の菩提とむらを葬うため、紀州の高野山へ供養塔を建こんりゆう立し、また相州足柄郡湯河原の向山の墓地にも、養父母のため墓碑を建て、手厚く供養をいたしました。右様みぎようの事がなくとも、長二郎の名は先年林大學頭様の折紙が付いた仏壇で、江戸中に響き渡りました処、又今度林大學頭様が礼記の講釈ふくしゆうで復讐ふくしゆうという折紙を付けられました珍らしい裁判で、一層名高くなつたので、清兵衛達の喜びやしきはいうまでもなく、坂倉屋助七も大おおきに喜び、或日筒井侯のお邸やしきへ伺いますと、殿様が先日腰元島路の申した口上もあれば、今は

職人でない長二郎ゆえ、島路を彼方かれかたへ遣わしては如何いかゞとの仰せに助七は願うところと速すみやかに媒酌を設け、龜甲屋方へ婚姻の儀を申入れました処、長二郎も喜んで承知いたしましたので、文政五年うまだ三月一日いちにちに婚礼を執とりおこな行い、夫婦睦むつまじく豊かに相暮しました。夫、夫婦の間に子が出来ませんので、養子を致して、長二郎の半之助は根岸へ隠居して、弘化二年こうかの九月二日みどしに五十三歳で死去いたしました。墓は孝徳院長譽義秀居士こうとくいんちやうよぎしゆうこうじと題して、谷中の天竜寺に残つてございます。

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の九」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1964（昭和39）年2月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の九」春陽堂

1927（昭和2）年8月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返しの記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」やカタカナ繰り返し記号「ヽ」と同様に用いられている二の字点（漢数

字の「二」を一筆書きにしたような形の繰り返し記号）は、「々」「、」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られません。しかし、作品の時代背

景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年10月31日公開

2003年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.w.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

名人長二

三遊亭圓朝

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 鈴木行三校訂・編纂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>